シネマ気球
第43号 200円

シネマ気球©
編集兼発行人　関田孝正
〒270－0107
千葉県流山市西深井339－2
TEL 04（7153）1533
FAX 04（7156）7122

パリタクシー

タクシー運転手と乗客の一日の旅

老婦人がタクシーの運転手に目的地に着くまで、パリの街のあちらこちらを寄り道してもらいながら自分自身の来し方を話していく物語だ。

いい話だった。

タクシーの運転手（ダニー・ブーン）が老婦人（リーヌ・ルノー）を住み慣れた一軒家から高齢者施設へと送る。運転手は妻子もち、家のローンなど借金をかかえており免停寸前でもあり、いらいらしながら毎日を過ごしている。客へのあつかいもぞんざいだ。老婦人は施設に行くまでの間に思い出の地に寄りたいと運転手にリクエスト、まず父親が亡くなった場所へ。建物の壁にプレートが張り付けてあり、そこに民間人が戦争中にナチスによって銃殺されたことが記されている。父親はレジスタンスだったのかナチスに逆らったのだろう。このあと、老婦人は自分の来し方を運転手に話しながら思い出の地をあちこち寄り道していく。運転手も老婦人の話を聞きながら、気持ちが打ち解けてくる。

老婦人は若い頃（アリス・イザーズ）、母親が舞台衣装係だったことから、その仕事を手伝っていた。パリを解放した連合軍のアメリカ兵士と恋に落ち一児をもうけるが、兵士はアメリカへ帰り恋は終わってしまう。その後フランス人と結婚するが、夫はDV男の本性を現す。子供への虐待に耐えかね、あるとき夫を傷つけてしまう。裁判での女の立場はフランスでも弱かった。一方的な裁決で長期の懲役刑に処されてしまう。刑に服している間に息子は成長し刑務所にも会いに来るが父親とはうまくいっておらず、戦場カメラマンとしてベトナムに行くことになる。服役後、女の権利回復を訴えて社会運動に身を投ずる。

あちこち思い出の地を寄り道して腹も減り、二人の間には和やかな空気がながれ、レストランでいっしょに食事をすることに。老婦人を目的地に送り届け、運転手は気持ちよく家路につく――。

映画の節目節目にシャンソンが流れるのだが、どれもいい曲で歌詞もストーリーにマッチしており味わえる。いい映画を見たなと、いい気持ちで映画館を後にした。監督・脚本は、クリスチャン・カリオン。

（絵と文・流漂介）

—読者から—

〈第10回〉最終便

あぁ、またやってしまう

農律捨丸

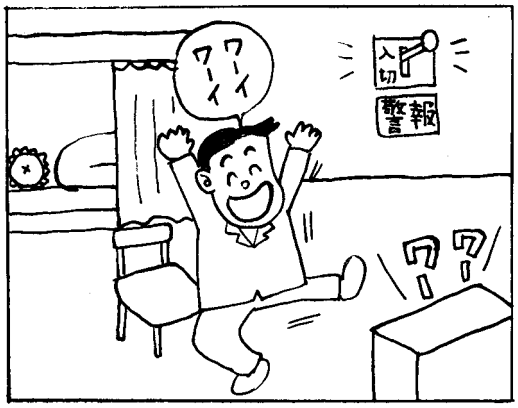
関田監督。お元気でしょうね。また、待機で一年過ごさせていただきました大部屋からお便りいたします。

〈報告　一〉なんだかお恥かしいことをしてしまいましたよ。泥棒や詐欺、痴漢などではありません。まだ現役の警備員の私です。これは業務上の失敗のこと。息子のすすめで就職し八年間勤めた、自宅近くの県立公園の職場を出て、昨夏から通うことになったのは、やはり県立の博物館でした。朝から夕方まで入館者を迎え、館内巡回とサービスヤード（＝駐車場）での受付業務。夜は学芸員たちの残業仕事にお付き合い（＝守衛）。深夜は一人で、無人になった館内のカギ閉め巡回。そして朝も来ないうちから、また無人の館をカギ開けして回る。そんな仕事を休みなく繰り返しています。三人ひと組でこの二十四時間業務を受け持つので、シフトも急で、いつも駆り立てられるように投入され、もうとっくに曜日の感覚も失くし、睡眠障害と仲良くしなくてはならない「働きバチ」と化しているのですよ。どうして、老人域に入ってからこんなに忙しい思いをしなくちゃ…など、こぼしてもムダというほどのエッセンシャルワーカーぶりなのですヵ。でも、Y市の旧市街ど真ん中にあるので（建物は重文）、いろいろな場面での刺激もあります。人に道をきかれることにはじまり、出入りの人たちとの接触や若い学芸員たちとの交流、「役人」との上下関係づくり…。十年も二十年も、半ば眠っていたような感覚を呼び覚ませられて、私としては、大いによろこんでいるところありです。「気に入っているんだ」と、事あるごとに自分に言いきかせているほど。ただ、これだけですめばよろしいのですが、そのための諸環境、道具立てのところでいくつかのハードルありなのでした。

〈報告　二〉こうした施設は通常、夜間は機械警備といって、張りめぐらしたセンサーによる防犯警戒がなされます。無人の空間で何か動くものを感知すれば、受信盤がブザーを鳴らして警備員に知らせるという仕組みです。ただそこで、最もその装置に捕まるのが、じつは警備員本人ということなのです。私もやりました。どう説明するもないような事ですが、自分が仮眠に入る直前にセットしたスイッチを、起きた途端に切ればよいというだけのこと。ただ、それをし忘れるのです。起き抜けの状態で、寝足りず、気まぐれに手順を変えたりすると、後で大事となる。初冬の夜明け前、その朝は四時台に起きました。サッカーワールド杯のスペイン戦の中継。当然、起きて直ぐにTVへ向かったのでした。（あの、一対〇を一対二に逆転したゲーム）ここで、さんざん注意されていた「起きたらまず、スイッチを切れ」を踏み外します。あとはもうTVの大興奮にのみ込まれてしまった。ミイラとりがミイラに、ネズミとりがネズミに？なっての大失態。そのまま館内をひと回りして警備員室へ戻ったところ、なんとも気が滅入るようなブザーに迎えられたのでした。しかも、自分がしでかしたことの全体を直ぐには理解出来ずに、別の火災報知器の警報であろうと判断、夜明け前の時間に先輩に電話をして助けを求めるやら大あわてをして、やっと事態を理解する始末でした。いやもう、思いだしても情けないやら、恥かしいやら。慣れのもたらす油断、緊張からの逸脱、寝不足。手順どおりの作業にはやはり、それだけの意味ありでした。しかも、こんなことをしても、朝の報告には何も異常がなかったとしなくてはならない。言い訳ながら、「みんなやることだ」ったようなのです。周囲の寛容に助けられますが、当然、自分は大人しく過ごさなくてはならなくなる。失敗をしてから、また仲間に入れ直してもらう。子ども世界の光景と同じでした。

〈報告　三〉同様なことを挙げれば誌面が埋まってしまいますが、軽重合わせて、まるで五十年ぶりの新入社員のようなことばかりしでかしています。じつに、我が性格ながらどうにかならないものか。そしてその度に、気分も小さくな

ったり、大きくなったりしているのですから。人生で懲りないとはこういうことなのでしょう。私は懲りない者なのでした。ですから、こうして監督にいつまでも売り込みを掛けつづけていられるのです。ただ、そんなふうにしてやって来た仕事体験ながらも、警備員ぐらしで再認識させられたことは大きいのです。〝驕るな、弛むな、くじけるな〟。じつに当たり前のことですが、七十二歳の今日、それはもう逃れられないところへ差し掛かってきました。情けないおのれでも、しっかり生きつづけなくてはならない。手にした気持ちも、失った何かも、すべてひっくるめて自分である。「演じる」ことにいつも望みを持ちつづけてきた輩でありながら、実際の役舞台に立つことはなく、自分の実人生を役化してきたようです。「ギャンブルは人生のようだが、人生はギャンブルではない」と言われていたのは、長年親しく接していただいた故寺内大吉和尚でした。それからすると、私の場合はまるで反転したケースとなります。ですがまだ、ここから先もやって行くしかありません。



カット：セキタ タカマサ

〈謝辞〉ここまで長いこと私の報告にお付き合いいただき、じつに感謝の気持ちでいっぱいです。そもそも始めの頃のことを思い出せば、十年間もこの「シネマ気球」の誌面をお借りして、自分の日常、心境を一方的に書きつづってこられるなど、考えられませんでした。むしろ、そこを逆にやってみないかと突かれたのが関田監督の眼力であったのでしょう。自己顕示欲というバネを刺激された私は、否も応もなく、そのまま今号まで来てしまいました。まずは、そのお付き合いに感謝を申し上げます。

そして、もはや恥の上塗りともいうべき勢いでつづけますが、無理矢理にもこれを読まされてきた方たちにもお詫び申し上げなくては（私はノースマホ、ノーネット人間のままなので）O君、君がいなくなって五年になるが、今でも君をまず思い浮かべながらこれを書いています。I君、私は高校時代からあまり進歩も向上もしていないのですよ。Mくん、いつも中途半端に誘っては約束を果たさず、ごめん。Fよ、さんざん連載で出演してもらったけれど、ノーギャラでたのみます。Tさん、こんなことばかりしてきたのが私の道でした。Dさん、広島へは行きますよ。A君、君の出世人生も山高ければ谷深しか。A^2よ、君もいなくなってしまったな。今から二人でたのしく呑めるところなのだけど。Yさん、次作を描いてください。めるへん万歳。Sよ、肉体を滅ぼすことなかれ。I^2君、ともかく広島へは行きますぞ。Hよ、われらは姉妹艦、大和と武蔵だ。S^2さん、ご冥福をお祈り申し上げています。S^3さん、毎号素早い返信をありがとうございます。H^2（A^2の兄）よ、わかっていますよ。F^2、福岡へも行きます。I^3さん、ともかく身体第一で健康回復を。Uさん、希望こそ栄光なり。M^2君、これもけっこう楽しいよ。Gちゃん、私のアホも、ついにこうなりました。I^4さん、後輩のその姿勢に頭の下がる思いです。M^3さん、また気が向いたらこれ読んでね。M^4よ、君は一番近くに住んでいるのだから。Nさん、真にグレートなのは君です。N^2さん、あなたは大分の風です。I^5さん、またぜひ写真を撮ってください。S^3君、人民憲法発祥の地で君らしい人生を歩む。えらいや。U^2さん、ごまめ書房の在りかは、あなたの地盤の近くなのです。いとこKよ、君は男だ。O^2さん、技術同盟のすすめ、頑張っていますね。S^4ちゃん、これ読んでくれていますか。――というわけで、追加の独演でした。すべては文責・農律。これがたのしみで投稿をつづけさせていただきました。志高いユーモリスト、ごまめ書房社主に重ねて心から御礼を申し上げます。

（おわり）

外国映画の森へ　2

森田洋一

・バビロン

この作品オスカーいけると思いました。ブラッド・ピットのモデルが、ジョン・ギルバート。グレタ・ガルボの相手役です。「肉体と悪魔」「恋多き女」など。トーキーに移行して「アンナ・クリスティ」で、ガルボのハスキーな声が話題に。「クリスティナ女王」で共演するものの、時代の流れに、逆らえず…マーゴット・ロビーのモデルが、クララ・ボウ、「あれ」「つばさ」が代表作。「つばさ」で、脇役のパイロット役で、ゲーリー・クーパーが注目され、スターへの道を…　サイレント時代のことを多少知っていると、奥行きを理解できる作品。音楽もよかったです。

・KG200ナチス爆撃航空団

冒頭から空中戦の描き方が見事です。物語はかなり脚色されているものの、アクションシーンが満載で、第二次大戦をベースにした娯楽作品のような感じがします。

昔テレビでみた「633爆撃隊」を思い出しました。

・エア

ナイキのエアジョーダン誕生の裏話をドキュメンタリータッチで描いています。マット・デイモンとベン・アフレック主演。スポーツシューズのおなじみのブランドがでてきます。

・パリタクシー

ロードムービー、そして、おばあさんが自分の過去を語るみたいな。ユーモアたっぷりに描いて、ラストで涙。マダムの若かりし頃を演じた女優さん、魅力ありました。

・ター

ケイト・ブランシェット、最高の演技といわれる理由が作品を鑑賞するとわかります。音楽映画なのに、セリフが多く淡々と進行する、鑑賞後も劇中で、あれは何だったのかと疑問点が残る、エンディングからはじまる、など、かなりこれまでの音楽映画とは異なる印象でした。指揮をするときの表情、ドイツ語の発音など、演技つくりにかなり苦労したと思います。

指揮者の条件、三か国語以上話せる、楽器の演奏がプロ並みにできる、オペラの指揮ができる、と、コミュニケーション能力、音楽の実力、記憶力が問われると、ある著書で、指摘されていたのを思い出しました。私は、生まれてから現在まで、楽器を演奏しようと思ったことはないです。指揮者を目指したこともない…音楽とは無縁の人生、それでも音楽を聴く、映画をみる、など、楽しむことはできるとわかりました。

おそらくマニアックなクラシック映画

・エストラパード街

「現金に手を出すな」「穴」のジャック・ベッケル監督のコメディー。ルイ・ジュールダン、「恋の手ほどき」「忘れじの面影」「007オクトパシー」の俳優さんが、出演。主演のアンヌ・ヴェルノンという女優さん、99歳でご存命です。

・永遠のガビー

マックス・オフュルス監督のイタリア映画です。冒頭シーンから、回想録へと場面が変わっていく、当時としては、かなり大胆な展開と感じました。今ですと、ごくありふれた手法かも、です。

下積みからはじまって、頂点にのぼりつめて、また下り坂。これも、今ならば、あるあるのパターン。

白黒作品、しかも30年代のイタリア、そうなると、新鮮な感じがしました。

・強く速く美しい

アイダルピノ監督のテニスを題材にした作品。見どころは、長いラリー。娘の才能をお金儲けに利用する母親。よくある愛憎劇。ウイル・スミスのドリームプランと比較して見ると面白いと思います。

・ラスティーメン

ロバート・ミッチャムとスーザン・ヘイワード主演、身長差がかなりあります。ロデオを題材にした作品で、投げ縄のシーンなど迫力があります。監督は、ニコラス・レイ。

あまり知られていない作品であるものの良作と思います。

・荒野の女たち

ジョン・フォード監督、女性たちが無法地帯でたくましく生きていく、アジアを舞台にした西部劇風の作品です。スクリーンでカラー作品として鑑賞。見ごたえがある一作。アン・バンクロフト主演。

ジャン・グレミニョン監督作品

「白い足」「この空は君のもの」「高原の情熱」など良質な秀作を手がけています。以前、この冊子でも紹介させて頂きました。今回は、2作品。

・曳き船

代表作のひとつ。見どころは、嵐に遭遇して、船が揺れるところ。30年代とは思えないようなリアルさがでています。ジャン・ギャバン、マドレーヌ・ルノー、ミシェル・モルガン、とキャストも安定した感じ。かなり、メロドラマ的な要素もあります。

・不思議なヴィクトル氏

サスペンス作品。よくある善人には裏の顔があるといった内容です。小道具の使い方、心理描写、伏線といったところが後年に影響を与えたと感じられます。

ゆるい映画好き パート3

中川恵彦

私個人の評価　星5つで満点

変わらずミーハーな映画好きです。

2022年6月以降の劇場で観た作品の紹介です。

8月19日「**TANGタング**」

二宮和也演じるポンコツな主人公と記憶のなくしたロボットの冒険を描くファンタジーです。

ロボットの声を二宮和也が演じたことも話題となりました。星3・2

9月12日「**異動辞令は音楽隊！**」

阿部寛が演じる、出世に興味がなく上司に楯突き、遂に命じられた異動先がまさかの警察音楽隊！

シリアスなところとクスッと笑えるところが入り混じってよい作品でした。星3・9

9月19日「**沈黙のパレード**」

東野圭吾のベストセラー小説を原作に、福山雅治演じる天才物理学者・湯川学が難事件を解決していく姿を描く「ガリレオ」シリーズの劇場版の3作目です。

オープニングでヒロインの少女の歌声が上手で圧倒されました。ガリレオシリーズはどれも切ない気持ちになると思いました。ずん・飯尾の演技すごかった。星3・8

2023年1月30日「**イチケイのカラス**」

2021年4月スタートのドラマの劇場版です。

ドラマでの竹野内豊演じる入間みちおが東京地方裁判所第3支部第1刑事部（通称イチケイ）を去って2年が経過したところからのお話です。

竹野内豊よりも黒木華演じる坂間千鶴のほうが主役でした。

この映画も切ない内容でしたが、最後はスッキリとしました。星3・9

4月14日「**ロストケア**」

介護がメインの暗い映画、松山ケンイチと長澤まさみの取り調べのシーンで容疑者の松山ケンイチに検事の長澤まさみが論破されてしまうシーンには、圧倒されました。柄本明演じる認知症役は壮絶でした。

色々と考えさせられる良い映画でした。星4・1

4月15日恒例の「**名探偵コナン・黒鉄の魚影**」劇場版26弾です。

やはり黒の組織が出てくると面白いです!!

来年も楽しみです！星4・2

5月5日「劇場版TOKYO MER」

ドラマ「TOKYO MER」の劇場版です。

「待っているだけじゃ救えない命がある」主人公鈴木亮平の名ゼリフが心に残ります。

まあ色々と「そんな無茶な！」って事も多々ありますが、感動させられました。星4・1

劇場で観る以外に最近ではwow以外にNETFLIXにも加入して益々色々な作品を楽しんでおります。

来シーズンはもっと劇場へ足を運びたいと思います。

ブラスの楽しさ実感

「異動辞令は音楽隊！」

片桐　公男

「今の警察は馬鹿ばっかりだ」とボヤく成瀬司（阿部寛）は、犯罪捜査一筋の鬼刑事で「コンプライアンス順守」を唱える上層部と何かとぶつかり厄介者扱いされていた。世の中は「アポ電強盗事件」で揺れていた。年寄りの一人暮らしを狙って警察を名乗り相手の老人を騙し、現金の置き場を聞きだし宅配便業者を装い鍵を開けさせ押し入る手口だ。成瀬は年老いた母親・幸子（賠償美津子）の面倒をみている。

ある日警察本部長の五十嵐（光石研）から呼び出され異動辞令を言い渡される。その内容は「警察音楽隊へ行ってほしい」と。成瀬は「音楽なんてできない」と拒否するが、五十嵐から「子どもの頃和太鼓をやっていたそうではないか」と指摘される。仕方なく成瀬はバスに乗り音楽隊の練習場を訪ねる。辿り着いた所は緑豊かな田舎、しかも練習場は古い木造の教会だった。

私にとって「警察音楽隊」というと「世界のお巡りさんコンサート」に出てくるニューヨーク市警やパリ警視庁、そして東京の警視庁音楽隊のような垢ぬけした演奏&恰好いい制服・制帽姿のエリート集団をイメージしてしまうが、映画が始まってそんなイメージとはまったく異なる音楽隊が出てきたので面食らってしまった。

成瀬に与えられたのはパーカッション（打楽器）。子ども時の和太鼓歴から与えられたポジションなのかも知れないと推測する。

音楽隊で子育てと交通課の仕事を両立して頑張る来島春子（清野菜名）は、威圧的言動の成瀬を敬遠するが、付き合ううちに居場所を失った成瀬の弱い部分を見て何かと面倒をみるようになる。サックス担当の北村裕司（高杉真宙）ら隊員とぶつかり合う成瀬だが、失敗を重ねながら練習にも熱が入り演奏も徐々に上達していく。

そんな時、本部長から「音楽隊は税金の無駄遣い」との言葉が発せられ、団員に「音楽隊解散」の話が伝わり演奏後の打ち上げ会場はお通夜のような暗い雰囲気に包まれる。

やがてアポ電強盗の主犯者を捜査一課総出で捕らえ、成瀬の後輩刑事からも感謝される。最後の50周年記念定期演奏会では、トランペットの来島春子、サックスの北村との息のあった演奏・バチさばきを披露する成瀬の顔には「鬼刑事」の顔はなく誇りと自信が感じられ微笑ましい。

主演の阿部寛は背が高くアクション場面でも迫力があり格好いい。春子役の清野もトランペット演奏も板につき好演が光ったし、サックス演奏役の高杉も成瀬とのやり取りなど好演を見せていた。

そして成瀬の母親を演ずる賠償美津子は、チャーミングな認知症のおばあさん役を見事にこなしていた。

コロナ感染拡大、ロシアのウクライナ侵略、安倍元首相暗殺と旧統一教会問題等々、暗いニュースばかりの世の中、この映画を観て久しぶりにワクワク楽しい気分になった。

音楽に関する映画「クレッシェンド」「太陽とボレロ」の2本を最近観たばかりだが、今回の映画は、私にとってそれを遥かにしのぐ楽しい内容であった。その要因は、クラシックとは違うジャズのデキシーやスタンダード、そしてマーチなど、ブラス特有の響きとリズム、そしてセッションにあるのかも知れない。80歳を超えて改めてブラスの楽しさを実感させられた。クラリネット&アルトサックスを吹いてきて「もうそろそろ楽器を置こうか」と考えることしばしばだが、この映画を観てしばらく辞められなくなってしまった。

◆この映画を観るきっかけは？

ある新聞の日曜版に俳優阿部寛のインタビュー記事が掲載されていて「この役のため3カ月ドラムの練習をしてきた。この齢になっての初挑戦」と書いてあった。恥ずかしながら私はこの俳優についてまったく知らなかったが、この記事を読み、そして後に書く自らの体験から映画を観てみたいと感じていた。

◆私の体験とは

私は造船大手企業I重工に就職

し、そこにあった吹奏楽団に入団した。戦前の海軍軍楽隊の流れをくむ吹奏楽団で、戦前は音を外すとぶん殴られたと先輩から聞かされた。仕事が終わると夜遅くまで練習をしていた。この楽団の最大のイベントは船の進水式での演奏であった。

40人ほどの団員が船首下に設けられた紅白の幕が張られた仮設舞台で国家やマーチを演奏し、船首に下げられたシャンパンと大クス玉が割れハトが飛び立ち紙吹雪が舞うと、見ていた作業員や見学者から一斉に拍手が贈られる。陸上のビルのような大きな船が滑り海に浮かんでいく光景は、普段は地味な造船所の晴れ舞台であった。60年以上経った今もその光景は忘れられない。

進水式の他には、豊島園での会社主催の運動会でパレードと演奏、後楽園や神宮球場で都市対抗野球の応援などに駆り出された。本業の仕事より演奏活動の方が正直楽しかった。

◆警視庁音楽隊との出会い

会社の吹奏楽団の先輩に警視庁音楽隊に所属するクラリネットを吹くM先輩がいた。会社の人事課がこのMに連絡を取り「わが社の若手奏者を育てて欲しい」と要請したらしい。それを警視庁が受け入れ十代の私を含めて数人が桜田門の警視庁へ何回かレッスンに通うことになった。

ワクワクする気持ちで仕事が終わるのを待って桜田門へ向かった。門番の巡査に来た目的を告げてエレベータに乗り5階か6階にあった音楽隊の練習場へ向かった。

警視庁音楽隊のMさんが現われレッスンを1時間ほど受けた。その時、窓から見えた銀座や日比谷のネオン輝く夜景は綺麗で今でも脳裏に焼き付いている。

これをきっかけに私は「音楽で飯を食いたい」と考え音楽学校へ通う決意をする。

と言っても学費も食うことも自分自身でやらねばならないので、昼間働き仕事を終えると楽器を持って音楽を学んだ。仕事で疲れていたが、ピアノ、クラリネットのレッスン、そして音楽理論を学んだ。クラリネットはこれまで数本吹き潰したが、自分の身体の一部のような感覚で正に愛器といえる。成瀬が映画のなかで「セッションは楽しい」と言うが、音楽のリズム、メロディ、ハーモニーが合った時は、演奏する方もそれを聴く人も音楽に酔いしれる。音楽のジャンルを問わずいつの時代にも人々の心の栄養となっていくことであろう。　2022年9月記す。

片桐　公男・写真&文

ニッポンの桜&梅アルバム

■B5判52ページ　オールカラー

■定価1200円■
送料&消費税、著者負担
申し込み先：片桐公男
Tel & Fax04（7153）3389
e-mail:mlf39487@nifty.com

製作：ごまめ書房

韓国テレビドラマ「私たちのブルース」に思うこと

堀江広子

コロナ禍以前から、めったに映画館に行く機会のない暮らしであったが、渦中にあって益々縁遠くなってしまった。

代わりに劇場で公開される映画ではなくて、タブレットで観られる韓国ドラマにはまり込んでしまっている。次から次へと生み出されるドラマに飽きることがなく、この原稿を書く時も、「還魂」という韓ドラに夢中でなかなか書き出せずにいたほどである。

昨年、「私たちのブルース」を見終わってからは、毎日のように様々なシーンを思い出しては、ぼんやりしてしまうほどであった。

そんなことが半年くらい続き、今ようやく冷静に思い出すことが出来る。

昔、昔、「若者たち」という日本のテレビドラマがあった。中学生のころだったか。山本圭、田中邦衛、佐藤オリエ、橋本功、松山省二の五人兄弟の物語が毎週放映されていたのだが、雰囲気が少し似ている。

済州島の漁村が舞台となっていて、極めて濃密な人間関係の中で暮らす人々が織りなす日常であり、時にドラマティックな展開ありの物語である。

筆者の夫が、親類やら同級生やらが周りに住んでいた地域の出身で、都会暮らしを経験し、戻って故郷に根を張って生きている人。私はそこへ嫁いできたよそ者で、自分の立ち位置に常に戸惑って暮らしてきたので、実はあまり好みのドラマではない。なので、第三者的立場で小説を読むように挑んでみたのだが、歳を重ねて鷹揚になったのか、結構楽しめた。

ハンスとウニ

高校の同級生のハンスとウニ。ハンサムでちょっとあか抜けたハンスを好きだったウニ。彼女は、頭がいいのに家族を養うために大学進学は諦め地元に残り必死に働き、今や海産物を扱う店の独身社長である。従業員をうまく束ね、村の人たちにも頼りにされて毎日忙しく働いている。

ハンスはソウルで銀行に勤め、娘をアメリカ留学させている。留学費用がかさみ借金を繰り返し首がまわらなくなっている。済州島の支店に転勤となって、かつての同級生たちと顔を合わせるようになった。

お金の工面を妻にも言えず、ハンスはウニの自分への好意を利用してお金を引き出させようと考える。妻とは離婚寸前で別居中だとウニに嘘をつき、一泊旅行に誘い出す。ここでの描写が丁寧で、ハンスの後ろめたい胸の内とウニの高まる女心が交差して単純な不倫旅行にならないところがいいのだ。見事な脚本力と、演出は、納得のいくものであった。演じるのは、ウニを、イ・ジョンウン、ハンスにチャ・スンウォンでベテラン俳優たちだ。

ウニとミラン

ウニはまた、高校の頃からずっと心の奥に苦い気持ちを持ち続けている。それは自分とは違い華やかで綺麗で男子高校生のマドンナだったミランの存在である。長年の親友でもあるが、一方で嫉妬心も渦巻いていた。ミランは島から出て、マッサージショップを経営していて、間もなく地元に戻ってくると聞きウニは心穏やかではない。

そんなウニの気持ちを知ってか知らずか、ミランは天真爛漫で相変わらず男たちにチヤホヤされお色気を漂わせていた。彼女はソウルで三回の結婚と離婚を経験、都会の暮らしに疲れ島に帰ってきた。

一触即発の雰囲気のウニとミランの関係も見ごたえあり。ミランには、整形（恐らく）女優のオム・ジョンファン。整形大国韓国は、女優のみならず男優も整形している人が多いのだが、見慣れてしまうもので、それよりも演技が上手ければオーライと思う。それくらい韓国の俳優さんは演技力に定評がある。

イングォンとホシク
その息子と娘

市場でスンデクッパを売っているイングォンと、氷店を営んでいるホシク。(スンデクッパとは韓国式ソーセージを豚の内臓や肉と一緒に豚骨スープで煮た物)二人は若い頃には親しく付き合っていたのに何が原因なのか今や市場中が周知の、犬猿の仲である。

イングォンの息子ヒョンと、ホシクの娘ヨンジュは同じ高校に通い、学年で首位を争うくらい成績優秀な二人は実は恋仲で、親に内緒で付き合っているうちに避妊に失敗しヨンジュは妊娠してしまう。

仲の悪い親たちの因縁が明かされていき和解へ進む過程も描かれ、純情で一途な若い二人の描き方も杓子定規ではなく、それはそれは丁寧に演出され、涙を誘う。

大人ばかりの登場人物の中で、達者な演技で期待される新人女優ノ・ユンソ演じるヨンジュと、ヒョン役のペ・ヒョンソンの初々しいカップルが、時に重苦しさが漂うドラマに一服の清涼剤のように光り輝く。事態の深刻さに思い悩むふたりの姿をリアルに映し出している。

船長ジウォンと
新人海女ヨンオクの恋

温厚で誠実な性格の船長ジウォンは魚を売って生計を立てているが、よそからやってきて様々なうわさの的である新人海女ヨンオクに、密かに心寄せるようになる。彼女の切ない身の上を聞かされたジウォンは、果たして固く閉ざしたヨンオクの心を溶かすことが出来るのか。ジウォンには、イケメン俳優キム・ウビン、ヨンオクは売れっ子女優ハン・ジミンが演じていた。だがキム・ウビンのジウオン役は失敗だと感じた。誠実さは似合うが、海の男には決して見えないところが残念。

市場で海産物を売っている
ふたりのおばあさんたちの人生

長年生きている中で、様々なことが身にふりかかり、辛い思いもたくさんしてきたであろう二人のおばあさんたちにスポットを当て、必死に生きる人の尊い人生が描かれる。

二人のベテラン女優さんはとてもグッド。

韓国映画界に燦然と輝く貴公子
イ・ビョンホンの見事な演技

筆者はイ・ビョンホンという俳優を名前だけは知っていたが、その容貌が好みではなかったので、彼が演じた作品を見たことがなかった。

若い時から貴公子のような風貌で、数多くの作品に主役級で演じ、非常に高い演技力でファンも多く、韓流ドラマの四天王の一人と呼ばれ、今もなおその地位を維持していると聞く。

そこで、試しに「ミスターサンシャイン」というドラマを見てみたところ、彼が多くのファンを魅了する訳が理解できる気がした。

とにかくその演技力に感嘆した。さすが長年不動の人気を保っていることに得心がいく。

今回はその美貌を発揮する役ではなく、一転して格好もダサくて、母親に極度に冷淡にふるまう、いけ好かない中年男性なのだ。母親につらく当たる理由はやがて解き明かされていくのだが、これが実に暗く辛い生い立ちによるものだった。

彼がこの役柄をよく引き受けたなと思う。わざとらしく演じるわけでもなく、本当にこんな男なのだと思わせるその演技は、イ・ビョンホンの役者人生に貴重な経験として深く刻まれるであろう。刑事とか検事とかスパイとかカッコいい役は、ある意味誰でも演じられるが、侮蔑の眼差しで小馬鹿にされるような役柄は、いかにもの俳優があてられるのが通常の映像の世界で、この起用は監督も俳優も大いなる賭けであったろう。

彼が演じるトラック雑貨商ドンソクと彼が惚れる繊細で壊れやすい性格の初恋の女性ソナの物語は長年に渡り複雑だ。ソナを、日本でも人気のシン・ミナが演じる。

全20話で、物語が進むごとに毎週楽しみで待ち遠しく思う久々のドラマであった。それにしても、日本でこのような見ごたえのあるドラマがなぜ見られなくなったのか残念でならない。この作品に匹敵する日本のドラマを、見てみたい。

×

×

×

『牛の鈴音』余聞

星　文子

近年、映画やテレビで紹介されたのをきっかけに、住人のプライバシーが侵害されたり、制作者の意図とかけ離れた反響を引き起こすことは少なくない。無遠慮な視線にさらされたり、思いがけない誤解を受けて被写体の名誉が損なわれた場合、個人の力で従来通りの静かな暮らしや名誉を取り戻すことは非常に難しい。

映画『おばあちゃんの家』では演技経験の全くない地元の素人のおばあさんを主役に抜擢した。そのためおばあさんは耳も聞こえず話もできないという設定になっているが、豊かな表情や言葉に頼らないやりとりは映画に深みや余韻を与える好結果につながった。映画がヒットすると、実際には出演料をもらっただけなのに、ずいぶん儲けたらしいとそねみを受けたり、知らない人間が家の周りをうろついたりするようになったのだ。村中が顔見知りの山里ではこのような状況が大きなストレスとなったことは想像に難くない。結局幼い孫娘をはじめとする家族に危害が加えられることを恐れたおばあさん一家は住み慣れた家を離れソウルに引っ越している。

『牛の鈴音』は韓国慶尚北道奉化郡の山村で牛を使って農作業をするチェ・ウォンギョン老と40歳の老牛が共に過ごした最後の一年を素材にしたドキュメンタリー映画だ。２００８年の撮影当時でも農作業や移動手段はトラクターが大勢で、役牛を使っていたのはおそらく韓国でも彼ひとりだった。老人は８歳の時、鍼治療のミスで左足ふくらはぎの筋肉を傷めたせいで脚は棒のように細く起居も不自由だ。老人にとって牛は移動手段であり、頼もしい農作業の助人であり、運搬手段でもあった。15～20年という牛の平均寿命からすると、40歳というのは超高齢に当たる。老人は這いずるようにして毎日牛のために畦の草を刈る。牛に食べさせる草だから除草剤や農薬は撒かない。市販の配合飼料ではなく手ずからくず野菜を刻みフスマと煮て食べさせる。平均寿命をはるかに超えて健康を維持できたのは、そんな昔ながらの食生活のおかげかもしれない。しかし牛が体調を崩した折診察に訪れた獣医は、老人に「いよいよ心の準備をするときだ」と告げる。何も食べなくなり横たわったままの牛が死ぬと老人は畑にお墓を作ってやる。

この作品は元々テレビのドキュメンタリー番組のために制作されたが、条件が合わず放映されなかったため、エピソードを追加して映画用に編集しなおされた。封切り当時韓国には独立映画専用館がないに等しかったので昔ながらの単館映画館で細々と上映されていたが、ＳＮＳも今ほど発達していなかったにもかかわらず口コミで評判が広がり、ついには大型シネマコンプレックスでも上映されるようになり、空前の大ヒットとなった。観客数２、９５３、０７６人というのは当時独立映画としては桁違いの大ヒットで、この記録は２０１４年『あなた、その川を渡らないで』に破られたが（観客数約４８０万人）それまで独立映画が動員したのとは桁違いに多くの観客を集めた作品といえる。純制作費８５００万ウォンに対し、映画館の売り上げだけでも１９０億ウォンあまりと莫大な利益を上げた。それまで鳴かず飛ばずのイ・チュンニョル監督にとって監督第一作が大当たりしたのは非常にめでたいことのはずだった。しかしヒットをきっかけにそれまで縁がなかったインタビューを受けたり、ニュースショーに引っ張り出されたりと、慣れないことが続いたせいでノイローゼになり、闘病していたところ詐欺に遭い大金をだまし取られ（そのせいで第二作の制作ができなくなった）、さらには収益金の分配を巡って制作者との訴訟に巻き込まれ、２０１１年には脳腫瘍の判定まで受け…と弱り目に祟り目で『牛の鈴音』を制作したことをひどく後悔しているという。

一方、慶尚北道泰化郡にはこれ

といった観光名所がないのに、映画の上映開始直後から『おばあちゃんの家』同様、撮影地周辺に観光客が増え始め、畑や家の周囲を歩き回り、無遠慮に家をのぞき込むなどして、静かだった日常生活が損なわれるようになった。

また『牛の鈴音』では老人と牛の絆や関係性を際立たせるために登場人物を絞り、老人の息子や娘たちは秋夕（お盆）の一場面にしか登場していない。実際には子どもたちは折々訪ねて来るだけでなく、仕送りするのはもちろん「（農作業は辞めて）町に来て一緒に暮らそう」と何度も勧めている。それに対し「子どもに気を遣って肩身狭く暮らしたくない」「今のままの暮らしで何の不自由もない」と断っていたのに、映画を見た観客が「なんという親不孝者。親をあんな不便な田舎に住まわせて面倒も見ていない」と子どもたちを猛烈に非難したのだ。親孝行こそが人として守るべき金科玉条の韓国ならではの反応といえよう。それやこれやの騒ぎは「世の中で一番嫌いなのは婆さんの愚痴、二番目は『牛の鈴音』の監督のイ・チュンニョル」と老人に言わしめるほどだった。

映画は牛の埋葬場面で終わっているが、老人もその5年後に亡くなり「苦楽を共にした牛のそばに埋めてくれ」との遺言どおり牛のそばにお墓が作られた。その後、老人の家の跡地には『牛の鈴音』テーマパークが造成され、牛と牛の引く車に乗ったおじいさんの銅像が置かれているという。

追悼 鈴木輝夫くん

本誌常連執筆者である鈴木輝夫くんが、3月5日に病没した。享年73歳。

付き合いは50年前20歳の頃に遡る。東京・芝浦で夜間の新聞発送現場でアリバイト仲間として知り合った。彼は東京写真大学で写真の勉強をしていた。新宿騒乱事件のときには、事件現場でシャッターを切っていたとの話を聞いたことがある。バイト先で映画好きの仲間と、休憩時間にいろいろ話しあっていた。文芸坐で見た加藤泰の「明治侠客伝・三代目襲名」が傑作だと熱弁を振るっていた。『映画評論』に「洋ピン考」というピンク洋画についてまとめた文章が当時の佐藤重臣編集長に認められて読者投稿欄を飾った。当時から批評文はうまかった。一人暮らしをしていた私のアパートの狭い部屋に長逗留したこともあった。それから私は大学を卒業、就職して後、映画の評論集「シネマ気球」を作ろうと考え、故郷静岡に帰っていた彼にも協力を仰いだ。第2号（1983年）からの参加であるが、「わが菊池浅次郎、私もあなたのようになりたかった」との文章を書いてもらった。「三代目襲名」の鶴田浩二演ずる主人公のようになりたいという熱い内容だった。第3号「錦之助よ、さらば。闇の中で赤く咲け!!」という萬屋錦之助の追悼文を書いたあと、しばらく「シネマ気球」からは遠ざかった。

「シネマ気球」への執筆を再開したのは、2004年第24号「鶴田浩二論」からである。これは本格的に鶴田浩二論を書きたいという希望で、3回の短期連載で終了した。長編論文「漢（おとこ）の愚かしさを演じ続けた男　鶴田浩二論、あるいは試論」は、ごまめ書房での単行本化を企画したが、本人が「もう内容が古くなった」との理由で未完・未刊行のままである。2007年第27号からは毎回20枚（400字詰め）、ボールペンで一枡一枡を埋めるようにして、昨年まで、いろいろなテーマで原稿を書き続けてくれた。この間、「シネマ気球」のあり方について厳しい指摘もしてくれた。

膵臓を患って入院したのはいつ頃だったか。一度見舞いに行ったことがあった。静岡の牧ノ原だ。千葉の流山からは少し遠いが、お見舞いがてら半分観光気分で近隣を散策して帰ろうとの気持ちだった。鶴田浩二論を書いているころだったか。「もう来なくていいぞ」とのことだったので、お見舞いはそれ1回だけだった。その後入院したことがあったようだが、妹さんから「兄が来なくてよいと言っています」と電話をいただいたこともあり、前回の忠告に従うことにした。その後、夏場は食欲がなくなるようだったが、電話をしたときには、気丈に話していた。

甚だ残念です。ご冥福を祈ります。

（関田孝正）

特集

コロナ小休止

少林寺拳法シニア流山健康クラブ

映画と音楽

石井宏明

「音の出るもの何でも好きで…」は、北島演歌の名文句の一節であるが、私もその何でも好きな人間の端くれであると自認している。

でも音なら何でも良いというわけではなく、それは音楽に限られる。音楽なら楽器の演奏、オペラ、独唱、合唱など古今東西、和洋ジャンルを問わない。

映画に音楽は付き物である。全く音楽が入らない映画というのを、私は寡聞にして知らない。

もちろん映画音楽は画面を引き立て、情景にマッチしたものが大半であるが、中にはライブ中継のように、音楽が主役のものもある。

私の友人に、シンガーソングライターの浜田省吾の熱烈なファンがいる。

私は、先日そのライブ映画の上映があると知り、近くの映画館に足を運んだ。

以前、中島みゆきのライブ映画も観たが、それとはまた別の次元の世界であった。

数万人?に及ぶ大観客の前の野外ステージに彼が登場する画面が出ると、あまり大きくない映画館であったが、場内は宛らライブ会場と化した。

私の周りの人は老若男女を問わず、一斉に座席から立ち上がり、大きな拍手を送り始めた。

歌が始まると、映画館の観客は、私を除いてほぼ全員総立ちになり、手拍子を打ちながら、手や足を上げ踊り始めた。私はただただ圧倒された。

気軽にライブを体感できる映画の底力を知った思いであった。

歌舞伎のライブ中継でも、普段は三階の立ち見席からオペラグラスで観る役者の表情も、恰も花道の傍で観ているように、映画でははっきり分かる。

大相撲の実況中継で、砂被りにいるような気分である。

ライブ中継は手頃な金額で、臨場感を満喫できる貴重な映像である。

先に映画のシーンを盛り立てる映画音楽について述べたが、テーマ音楽を聴いただけで、そのシーンが甦ってくるものもある。

「シェーン」の「遥かなる呼び声」や、寅さんシリーズの「男はつらいよ」のテーマ曲、そして「道」の「ジェルソミーナ」など、音楽を聴いただけで、その場面が浮かんでくる。

私が最近観た映画では、台頭著しいインド映画のミュージカル「RRR」が出色であった。

主役の男性2人が踊る息の合ったダンス「ナートゥ」には、清々しい興奮を覚えた。

私はミュージカル映画の魅力は、音楽とダンス、主演俳優、そしてハッピーエンドの物語だと思っている。

私にとって数多く観たミュージカル映画の中で、何度観ても飽きない魅力的な作品の双璧は「サウンド・オブ・ミュージック」と「ウエスト・サイド物語」である。

「サウンド・オブ・ミュージック」は、言わずと知れたジュリー・アンドリュースの代表作で、7人の子どもたちと女性の家庭教師、そして厳格な元海軍大佐の父親との物語である

「エーデルワイス」や「ドレミの歌」は、聴くだけで場面が浮かんでくる。何度観ても飽きない不朽の名作である。

「ウエスト・サイド物語」は、私が初めてナタリー・ウッドとジョージ・チャキリスの魅力に触れた映画である。

魅力的な2人の主役は、私を夢の世界へと導いてくれた。ナタリー・ウッドとリチャード・ベイマーのデュエット「トゥナイト」のバルコニーのシーンは、思い出すだけで胸が躍る名場面であった。

最後に、私の細やかな?夢は、ミュージカルの本場アメリカのブロードウェイに数日間滞在して、毎日劇場に通い、ミュージカル三昧の日々を送ることである。

完

「少林寺拳法シニア流山健康クラブ」（代表者＝青柳武）は、一般財団法人少林寺拳法連盟の管轄下にあり、少林寺拳法の技法のエッセンスを取り入れた手軽な運動により、健康増進を目的として活動しています。流山市立常盤松中学校・武道場で週２回（火曜・木曜、夜７時から１時間半）、流山市コミュニティプラザで週１回（金曜、朝10時から１時間半）練習しています。

「東京物語」

大築　猛

「東京物語」は、１９５３年（昭和28年）に公開されたモノクロームの松竹映画で、監督は小津安二郎、主演は笠智衆と原節子。観たのは新宿だったと思いますが、正確には思い出せません。社会人になってからなので半世紀も前になります。ストーリーの記憶も怪しいので、今回、ＤＶＤを数回観かえしたり調べたりしました。案の定、初めて観た映画のようでした。

昭和二十年代後半の終戦後の尾道、人々に安心な日常が戻って来た頃だろうか。垣根越しに声をかける近所の中年女と周吉の会話。周吉が「まぁ元気なうちに子供たちにも会うとこうと思いましてなぁ」と答えると、中年女は「ええ、ええ、ごゆっくりと。立派な息子さんや娘さんがいなさって結構ですなぁ、ほんとうにお幸せでさ」と返し、物語が始まります。

平山周吉（笠智衆）七十歳と妻のとみ（東山千栄子）六十七歳は、まだ嫁入り前の小学校教師をしている次女の京子（香川京子）に留守を頼み、旅支度に取り掛かっています。二十年ぶりに子供たちの暮らしぶりを見ておこうと、東京に出掛けます。尾道から昼過ぎの汽車で出発し、約十六時間の長旅で翌日東京に着きます。経済発展を象徴するように煙を吐き出す背の高い四本の煙突。周吉ととみは、下町の荒川土手の近くで小さな内科病院を開業する長男の幸一（山村聰）の家を訪ねます。幸一の家では、妻の文子（三宅邦子）と二人の息子（實と勇）、同じく下町で美容院を営む長女の志げ（杉村春子）、戦死した次男昌二の妻の紀子（原節子）が迎えます。久しぶりの家族の集まりで、幸一と志げは、尾道の様子や知人の消息を尋ねたり会話が弾み、愉しいひと時が続きます。翌日曜日、東京見物に出ようとしたところで急患が入り、結局出掛けることができません。個人開業医の幸一は、急患となれば優先しなければ評判にも影響します。とみは、臍を曲げている孫の勇をつれて土手に遊びに出ます。その後、同じ下町で美容院を営む志げ（杉村春子）の家に移りますが、美容師である志げは、まさにお客様あってのサービス業です。夫の庫造（中村伸郎）も忙しく、両親はどこにも出掛けられぬまま、二階で無為に時間を過ごします。幸一も志げも、日々に忙殺され融通も利かず、両親を構っていられないのです。二人が選んだ生活を優先せざるをえないことは仕方ありません。志げは、戦死した次男の妻の紀子に一日両親の面倒を見てくれるよう頼みます。商事会社で働く紀子はわざわざ仕事を休んで二人を遊覧バス観光に連れていきます。広々とした皇居、華やかな銀座四丁目、松屋の屋上から望む東京の街、遠くに国会議事堂が見えます。初めての東京見物です。夜は彼女の狭いアパートの一室で精一杯のもてなしをします。紀子は質素に暮らしています。共同炊事場で廊下には三輪車や物が放置されています。両親をもてなす酒を隣家に借りに行く。貸し借りをしながら助け合う関係がまだ残っている時代です。出前をとって膳をつくる紀子は、実の子でもないのに、いちばん優しい。次男昌二と死別して既に八年が経過しています。少なからず違和感があります。昌二の遺影も部屋の中に大切に飾られています。昌二の思い出を偲ぶ周吉ととみに団扇の風を送りながら、紀子も懐かしく、そして孤独を噛みしめます。両親の上京を持て余す幸一と志げは、風光明媚で温泉や食事も楽しめる熱海で過ごさせようと考え、幸一と志げは金を出し合って両親を熱海に送り出すのです。老夫婦は、熱海で温泉に入りゆっくりとくつろぎます。旅館の窓からは、静かな海、その先に初島が見えます。ところが夜になると、客でごった返し、流しの楽器音・唄声、遅くまで宴会や麻雀などの騒ぐ声で寝つけません。翌朝、防波堤に腰掛けて海を見る二人。「京子はどうしてますかね」「東京も見たし、熱海も見たし、そろそろ尾道に帰ろうか」「帰りますか」と話し合います。とみは少しめまいがして、ゆっくり立ち上がり、防波堤の上を歩きながら、翌日尾道に帰ることを決め、予定を切り上げていったん志げの家に戻っていきます。志げは「何でもっとゆっくりしてこなかったの」と困惑し、美容院の寄り合いを理由に宿泊をやんわり断ります。二人は「とうとう宿なしになってしもうた」と苦笑します。居場所を失った周吉は旧友の代書をやっている服部（十朱久雄）のところへ、とみは紀子のところへ泊めて

もらうことにします。周吉は尾道で親しくしていた服部を訪ねるが、服部は家に泊めることはできないから外で飲もうと言い、やはり尾道で親しかった元警察官の沼田（東野英治郎）にも声をかけて、三人は酒を酌み交わし旧交を温めます。周吉はひどく酔い、深夜に沼田とともにお回りさんに連れられて、志げの家に帰ると、ふたりとも美容室の椅子で眠り込んでしまいます。志げは夫に対して父への文句をぶちまけるのです。一方、再び紀子を訪れたとみ。紀子は、とみの肩を熱心に揉んで世話をし、ポチ袋にお金まで入れて渡します。とみは戦死した昌二の写真を飾ってくれる紀子に感謝しながら、再婚を薦める。とみは「紀子に苦労のさせどおしだ」と心を痛めます。紀子の優しさにとみは涙をこぼします。子供達を頼りに上京したけれど、思うように相手にされず、時間を持て余す老夫婦。翌日の夜行で老夫婦は帰ることになり、ホッとした長男長女は紀子を交えて彼らを見送ります。とみは「楽しい思いを一杯させてもらって」「もう思い残すことは無い」と言い、「もしものことがあっても尾道にはもう来てもらわんでいい」と東京でのひとときの感謝を、周吉と共に子供たちに伝えます。二十一時発夜行急行「安芸」広島行きで帰路の列車に乗った二人でしたが、車中でとみは体調を崩し、大阪で途中下車します。三男である敬三（大坂志郎）の家に泊めてもらいます。なんとかとみも元気になり、そろって尾道に帰りますが、まもなく、とみの体調が急変し、危篤状態になり、「ハハ　キトク」の電報が届きます。別れたばかりの子供たちが今度は尾道に帰郷します。結局とみは他界し、そのまま葬儀が行われます。死別直後は悲しみに暮れた一同でしたが、葬儀が終わると、三人（長男、長女、三男）はさっさと東京、大阪へと帰っていきました。紀子だけが寂しげな周吉を放っておけず、しばらく残ります。次女の京子は冷淡な兄や姉に対し、腹を立てますが、紀子は義兄姉をかばい、「子どもだって大きくなると誰だってみな、自分の生活が一番大事になってくるのよ」と静かに諭すのです。やがて残っていた紀子もいよいよ帰ることになります。紀子が東京に帰る日、周吉は「とみが、紀子の家に泊まったあの晩がいちばん嬉しかった」と。さらに「気兼ねなく先々、幸せになってくれることを祈っている。自分が育てた子供より、いわば他人のあんたの方が、よっぽどわしらに良くしてくれた。ありがとう」と感謝を表し、妻の形見の懐中時計を渡します。紀子は声をあげて泣き崩れるのです。紀子も東京へ帰ってしまった後、垣根越しに中年女が「皆さんお帰りになって、お寂しうなりましたなぁ、ほんとに急なこってしたなぁ、全くなぁ、お寂しいこってすなぁ」と挨拶する。すると周吉が「いやぁ・・・、気のきかん奴でしたが、こんなことなら、生きとるうちにもっと優しうしといてやりゃよかったと思いますよ・・・。一人になると急に日が長うなりますわい」と呟くように返します。翌朝、京子が勤めに出たがらんとした部屋で周吉一人。団扇でゆっくり扇ぎながら夏の海を眺めていると、ポンポン船のエンジンの響きが聞こえてきます。やがて目の前を通り過ぎて小さくなっていくところで終演となります。

　戦後の復興、すさまじいスピードで高度、近代化へ成長する経済。人々は都市に向い、豊かさを求めていきます。これまでの日本の家族制度が、共生社会から競争社会へと急激に移行していく中、家族のあり方や人間関係について「人間としてどう生きるか、そして、自分に何ができるか」を考えさせる作品ではないかと思いました。ちなみに私は映画を観た後、実家の両親に電話を掛けたら「どがしたか？」「いや別に」の記憶は未だに残っています。

　いろいろ調べごとをしている中から、興味深かった事例を数点。

⑴私が好きな俳優の笠智衆は、バイプレーヤーとして、「日本を代表する老け役」の名優なのですが、この作品で七十歳の平山周吉役を演じた時の年齢はなんと四十八歳でした。

⑵「映画は娯楽の王様」であった１９５３年（昭和28年）の日本での主な公開作品は「東京物語」と「ローマの休日」「雨に唄えば」「禁じられた遊び」「ライムライト」「地上より永遠に」「ナイアガラ」「終着駅」など超名画ぞろいで、映画人気の高さを窺わせます。

⑶１９５３年（昭和28年）当時の物の値段は、大卒初任給（公務員）７、６５０円／高卒初任給（公務員）５、４００円／白米（10kg）６８０円／ビール１０７円／

ラーメン30円／かけそば20円／牛乳15円／喫茶店（コーヒー）35円／銭湯15円／新聞購読料280円／公衆電話10円／映画館120円／テレビ受像機180、000円（やはり高嶺の花だったんですね。

⑷今回私が、「東京物語」の原稿を書いている最中の2023年5月6日に、イギリス「チャールズ国王」の70年ぶりの「戴冠式」が執り行われたニュースが流れました。70年前と言えば、昨年9月に96歳老衰で崩御されたイギリス女王「エリザベス2世」の戴冠式が執り行われた1953年（昭和28年）で、偶然にも「東京物語」公開と同じ年でした。　以上

×

×

×

森林火災に立ち向かう

土田博志

突然起きる火災、大きく立ちのぼる黒煙と炎、風により舞い踊る火の粉。

夜の暗がりを、オレンジ色に際立たせ不気味に揺れ動く炎、いつ襲ってくるか分からない不安感を漂わせます。

今年も、このような火災ニュース映像を良く目にします。

火災の恐さと、火を消すのが大変な対象物があります。

「モンタナの目撃者」アンジェリーナ・ジョリー

高層ビル、多くの人が出入りする営業中のデパート、地下街、雑居ビル、病院、高齢者福祉施設、化学工場、コンビナート、原子力施設等数多く存在しますが、その中で、森林火災を題材とした映画です。

一つ目は、「モンタナの目撃者」で、監督はテイラー・シェリダン、出演者はアンジェリーナ・ジョリー、フィン・リトル、ニコラス・ホルトです。

二つ目は、「オンリー・ザ・ブレイブ」です。

監督はジョセフ・コシンスキー、出演者はジョシュ・ブローリン、マイルズ・テラーなどです。

この映画では、巨大な火に対していかに人間が無力であるか、消火が大変で状況変化が著しいことか。

火に囲まれた時に、視覚からは巨大な火災、嗅覚は煙や燃え焦げる臭い、聴覚はバリバリ、メリメリと激しく燃える音、皮膚感覚では普段感じた事のない熱さを感じ、心は動揺し冷静な判断が出来るか、緊張感につつまれます。

「モンタナの目撃者」では、人為的に火を付け拡大させ大規模な森林火災になりました。

日本では、森林火災は少ないようですが、タバコのポイ捨て、野焼きの火が飛び火したり、落雷、キャンプファイヤーの不始末などが原因で起こるようです。

消火手段も、ヘリや飛行機で上空から水や消火剤を散布していますが、延焼速度も早く消えづらくいかに困難か分かります。

感動と共感、スリルとアクション、悲しみと喜びとが、いろいろと見られる映画です。

コロナウイルスの流行も、大分落ち着き街に人出が戻り、賑やかになりつつありますが、映画館の鑑賞代が値上されるのがつらいです。

重い気分をフルスイングで吹き飛ばし、私の好きな格言、彫刻家・平櫛田中（ひらくしでんちゅう）の「六十、七十は、鼻たれ小僧、男盛りは百から百から、わしもこれからこれから」のように、フットワーク軽く、様々な映画に接して日々健康で楽しく過ごして行きたいと思う今日この頃です。

田中劇場二本立て！

田中　稔

「力」だけが全ての時代、ガンマンはどう生きたか！

一九六〇年代に製作されたマカロニ・ウェスタン。イタリア製西部劇を表わす和製英語である。監督はセルジオ・レオーネ（伊）。

「続・夕陽のガンマン／地獄の決斗」三時間近くに及ぶ長編。自宅CSでの視聴の機会を得た。

時は一八六〇年代のアメリカ南北戦争の時代、三人のガンマン（賞金稼ぎ）の生き様を描いている。

個人の賞金首（三千ドル）を取るよりも、ウワサに聞く二十万ドルの軍資金をいただく旅に心動かされる三人のガンマン。ブロンディ（クリント・イーストウッド）、テュコ（イーライ・ウォラック）、偽名を名のるエンジェル（リーバン・クリーフ）。

テュコはブロンディに砂漠に放り出され、やっとの思いで百キロの道を歩き、町にたどり着く。憔悴しきった心と体を癒し、同時にブロンディへの憎悪を生む。テュコは町でリボルバーの拳銃と弾を奪い、互いに憎み合うも、大金を自分の物にする為、利用する事を考える。馬に乗るブロンディの履く靴に付いている滑車を見ると、西部劇の醍醐味を感じる。またその形がすばらしいと思う。

テュコの仲間三人がブロンディを襲うが、あっけなく三人は倒される。背中からテュコに銃を突き付けられる。形成は逆転、テュコが馬に乗り、ブロンディは歩いて砂漠を行く。途中南軍の馬車に遭遇、乗っていた息の無くなりかけた独眼の男（カーソン）から、大金（二十万ドル）の隠された霊場の名をテュコが聞き、埋められた場所を示す墓碑銘はブロンディが聞いてしまう。皮肉にも二人は手を組まざるを得ない。一方リーバン・クリーフ演ずる悪玉エンジェルは、北軍にもぐり込む。悪役なれど涼しい目のこの俳優の存在はマカロニ・ウエスタンには欠かせない！私の好きな男優である。捕虜として捕えられた、善玉ブロンディと卑劣漢テュコから二十万ドルの在り処を聞き出そうと拷問し、何とかテュコから霊場の名を聞き出す。夥しい墓標に囲まれたサークル状の広場で三人が対峙する。

イラスト＝筆者

エンジェルはブロンディの銃弾に倒れ、テュコの銃からは弾が抜かれていた。ブロンディは賞金の半分をテュコに置いていき、半分を自分の馬に括り付けて去って行く。ブロンディ演じるクリント・イーストウッドがカッコイイ、しびれてしまうラストシーンである。

スクリーン全体に流れる音楽は、イタリアを思わせ、哀愁を感じさせる。音楽はエンニオ・モリコーネ、イタリアの作曲家である。熱い男達の闘いを映す画面に、涼しい風を感じさせる音楽だ。

自宅のTVの前から離れて、大きなスクリーンで鑑賞するのも、悪くは無いのでは？とふとそう感じた。懐かしい名作である。

「少林寺拳法」と共に歩む

人の生き方は十人十色、百人百通りである。人は皆同じであり、一緒だと言う方もいると思うが、私はそれは違うと考えている。

人の外見だけを見て判断しているのであろうが、人の内面「心」と「体」があり、人として生きている。人を外見だけで見抜く事はできない。自分の心の内面から外の世界を観た時、自分には理解できない現象ばかりが心にひっかかる。「心外無法（しんげむほう）」、学術的解釈はさておき、ここでは「凡そ人心は仏であり神である。」と云う様に、少林寺拳法は性善説を説いている。神は心の中にこそあるものである。

社会心理学者レオン・フェスティンガー博士によると、「私達は皆、さまざまな信念・概念・思想を持っており、脳が自己肯定しながら生きている。」

これを「認知」と呼び、たとえば歌が好きと言う事と、二〇〇一年に誰が内閣総理大臣になっていたかと言う事は、何の関係もない。しかし複数の考え方や行動に相互関係がある場合、我々は、これを矛盾なく両立させなくてはならないと切実に感じる。矛盾によって引き起こされる不協和状態に脳が耐えられないからだ。脳を平衡状態に戻すには、矛盾した認知や行動を変えなくてはならない。

ふつうは行動よりも思考を変え

る方が簡単なので、私達は考え方を変えることになるのである。

私の青年期は、いたって気のやさしい、真面目な性格と言えば聞こえはいいが、スポーツに汗を流しても気性は変わらず、自分の気質の弱さを何とかしたいと考えていた。少林寺拳法を習い始めたのは、四十七歳になってから、子供と二人で入門した。人からバカにされたくはない、強い人間になりたいと思うのは人間の根元的欲求から来たものに他ならない。武道によって自己改革を目ざしたのである。

本当の強さとは何か？少林寺拳法が、私に導き出してくれたのである。少林寺拳法を指導してくださる先生は、人間的魅力に溢れ、行動力に富み、人によってその言を変えず、誰も平等に接し、おもいやりも忘れない方です。

私が指導を担う立場になっても、ここ迄で私の役割が終了したのではなく、自分自身の修養人生はこの先も続くのである。

運命等は信じない、自分の思い通りの人生を歩むだけである。

以上

1冊の本から音楽映画のDVDを探す

柳橋和郎（やぎはし）

１９５８年から１９６０年代にイギリス、アメリカ、少しですがフランスで作られた、音楽映画（ロックとポップ）の紹介をする洋書を見つけました。タイトルはUNTAMED YOUTH!昔見ることができなかった音楽映画のＤＶＤを探すのに最適な本です。洋書と言っても英語の説明文は無くアーティスト名と出演した映画タイトルとその画像が１枚だけ出ているというシンプルな本で厚さは２センチ有ります。

この本を元に見たいＤＶＤを探すことにしました。映画館の料金と同じくらい２０００円以下、できれば１０００円以下で買える作品を探します。

アマゾンで検索。

最初にプリティ・ウーマン１９６４年ヒットで有名（後に同名映画の主題歌になる、１９９０年）１９５０年代から活躍したロック・レジェンドのロイ・オービソンが９曲ほど歌っている“The fastest guitar alive”を検索しました。有りました、１６３２円。アメリカ発送でリージョンが１でリージョン２の日本では再生できません。パソコンならリージョンを切り替えて見ることできますが５回すぎると固定されてしまうので保留。この本には“latter movies:roadie”と出ていたので焼き直しの映画が作られたのか“roadie”を検索してみると日本版が有り中古で６５４円と安いので注文。ミートローフ主演で他にアリス・クーパー、ブロンディ、それとロイ・オービソンがカメオ出演となっていました。映画を見るとロイ・オービソンの歌う場面はほとんどなく焼き直しではなく別物ではないかと思いました。主演のミートローフは良く耳にする人でしたが、ほとんど聞いたことはなく調べてみると歌手としては１億万枚以上販売、映画は65作以上出演と、すごい人でしたが２０２２年１月に74歳で他界していました。

映画はミートローフがローディとなり無理難題を押しつけられますが荒技でライブができるようにする超やり手。ドタバタ映画で見て笑ってくだらねーという娯楽作品でした。

アマゾンは検索するとそれに関連する商品がかってに出てきます。その中にエリック・クラプトンの〝クロスロード・ギター・フェスティバル〟のＤＶＤが出てきました。１２１５円、前見た時はもっと高かったと思います。これは買わないわけには行きません。

クロスロードとは〝クリームの素晴らしき世界〟という２枚組アルバムで１枚目はスタジオ録音、２枚目がライブ録音になっていて、ライブ録音１曲目でエリック・クラプトンのかっこいい歌と演奏が聞けます。数ある名演の中で１番好きな曲です。この曲の作者はブルース界伝説のロバート・ジョンソンです。このフェスティバルはエリック・クラプトンが設立したドラッグ治療施設クロスロード・センターへのチャリティーとして開催されエリック・クラプトン自身がドラッグに溺れた時まわりの友人から助けられて立ち直ったの

でその経験からこの施設を作ったのではないかと思います。フェスティバルは1998年に初めて行われこのDVDは2回目2004年の物。出演がバディ・ガイ、BB・キング、ジェームス・テイラー、JJ・ケール、サンタナ、ジョン・マクローリン、ラリー・カールトン、ジョー・ウオルシュ他有名すぎるアーティストばかりです。今年2023年9月には米LAで開催されます。

検索していると〝ニューポート・フォーク・フェスティバル〟のDVDも出てきて1796円。これは1963年から1966年のフェスティバルを97分に収めた物で1965年7月25日ボブ・ディランがアコースティックだけのフォーク・フェスティバルで突然エレキ・ギターを持ち出しポール・バターフィールズ・ブルース・バンドを従え歌い出し、観衆から非難囂々となった問題の場面を見ることができます。当時フォークを聞く人達はエレキを嫌っていました。ブーイングの嵐ですが歌うボブ・ディランがすごくカッコいいです。バンドの演奏もノリが良く良い感じです。この瞬間がフォークロックの誕生です。ノーベル賞も取ったボブ・ディランですが、ボブ・ディランはノーベル賞は必要ないがノーベル賞がボブ・ディランを必要としたと言われています。さすがです。

ボブ・ディランのバックをやったポール・バターフィールド・ブルース・バンドのギタリスト、マイク・ブルームフィールドはハードロック創成期のギタリストでもう亡くなっていて若い頃の演奏が見られるのも価値ありです。

他ジョーン・バエズ、ピーター・ポール・アンド・マリー、ピート・シガー、ジュディ・コリンズ他フォーク界の歴史的人物が出ています。そしてハードロックの元となるブルース。その重鎮ミシシッピ・ジョン・ハート、サン・ハウス、ハウリン・ウルフ達の演奏が見られるのも伝説の人達なので歴史的価値があります。このドキュメンタリー映画は1967年に公開されました。これも見ないわけにはいきません。

こんなふうに欲しい商品が出てくるので、他にもアレサ・フランクリンの半世紀を俳優ジェニファー・ハドソンが演じる〝リスペクト〟960円。去年公開されたライブ・ドキュメンタリーの〝アメイジング・グレイス〟943円は1972年のゴスペル・ライブですが撮影した時、技術的な失敗で映像と音をシンクロできずお蔵入りしていました。そのフィルムを最新技術で完成させた作品で、去年公開され見たかったのですが行けなかった映画で買ってしまいました。このライブのお客にノリの良い白人がいると思ったらミック・ジャガーでした。サプライズでした。

元にもどり本から別の商品を探して行きます。

ビートルズと同時期に活躍したホリーズが出ているというミュージカル“it'all over the town”を検索すると有りました、1291円。これはイギリスからの発送で手に入ります。ヨーロッパは日本と同じリージョン2なので良いのですが、今度は画像処理がPALということで日本はNTSC方式なので見ることできません。中にはPALを変換して見られるようになっているプレーヤーも出ていますが、自分の持っているのはNTSCのみで駄目です。ただパソコンなら見ることできるので購入しました。リージョンのように5回までという制約はありません。この映画の主役はフランキー・ヴォーガン。イギリスで歌手と俳優をやっていて1960年には映画〝恋をしましょう〟でマリリン・モンローと共演、この映画の主役はイブ・モンタンですがフランキー・ヴォーガンはマリリン・モンローとデュエットしています。目当てのホリーズは1963年5月

友人が70歳になって俳句を始めました。毎朝食事前に散歩しながら俳句の題材を探すのだとか。
→こういうのを「ハイカイ老人」というのですね。（本書より）
これまで書き溜め、人様の前で発表したダジャレ160篇を一挙公開！

ダジャレ工房

山田　徹・著
新書判200頁／1000円＋税
ＩＳＢＮ　978-4-902387-27-8

ごまめ書房
〒270－0107
千葉県流山市西深井339－2
ＴＥＬ 04－7156－7121
ＦＡＸ 04－7156－7122

デビューでこの映画は１９６４年１月に公開なのでデビューしたてのホリーズを見ることができました。

後１９６０年結成のザ・スプリングフィールズが出ています。〝この胸のときめきを〟のヒットで有名なダスティ・スプリングフィールドが兄のトム・スプリングフィールドと兄の友達と結成したフォーク・グループですがこの映画を撮った後ダスティが独り立ちしているので貴重な映像です。ザ・スプリングフィールズを見ているとシーカーズと似ていると思いましたがトム・スプリングフィールドはシーカーズをプロデュースしていて最大のヒット曲ジョージー・ガール他シーカーズに沢山作曲していました。〝ジョージー・ガール〟は音楽映画ではありませんがこのＤＶＤも別の機会に探して見て見たいなと思います。

ロックの原点ロカビリーの映像が見たくファッツ・ドミノ他ジェリー・リー・ルイス、カール・パーキンス他ロカビリーのスターが出演している〝ジャンボリー〟を検索すると日本版が出ていたので買いました、１２８０円。内容は歌手を売り出す仕事をしていた夫婦、すでに別れていて別々に活動していましたが、たまたまオーディションの会場で鉢合わせに、お互い歌手志望の若い男性歌手と女性歌手を連れていました。その出会いから男女のデュエットができラジオ局回りをします。映画には有名なディスクジョッキーが沢山出てきます。２人の若い歌手はお互いに惹かれていきラブ・ストーリーを中心に映画は展開します。そこにロカビリーのスターが出てきます。ジャンルは違いますがジャズのカウント・ベーシーも出てきます。１９５０年代から１９６０年代初期の雰囲気が伝わる貴重な映像です。ラブ・ストーリーはおきまりのパターンで恋をして一時別れそうになりますが最後に元に戻りハッピー・エンドという感じです。主人公の若い女性がフレダ・ホロウェイと言い小柄で可愛い女優ですが、調べてもこの映画しか出てきません。英語のウイキペディアでも出てきません。YouTubeで名前を入れてもこのジャンボリーしか出てきません。全然情報がなくこの後どうしたのでしょうか？歌が上手いと思ったらコニー・フランシスが吹き替えていました。後なんの脈絡もなくこの映画に出てくるJodie Sandsが歌う“please don't say sayonara goodbye”という歌が心に残りました。ところどころsayonaraと日本語で歌います。こんな歌があったのかとこの歌を調べていたらマーロン・ブランド出演のSayonaraという映画があり、この映画の主題歌でPat Kirbyが歌う“sayonara”という別の歌があるのを知りました。こちらのほうがより切ない感じの歌です。この歌はIrving Berlin作で世界で1番売れた歌、ホワイトクリスマスを作った人です。そしてこの映画ナンシー梅木が出ていてアカデミー賞助演女優賞を取っています。ナンシー梅木もこの歌、歌っているのですが映画の挿入歌はPat Kirbyです。この歌Nat King Coleも自分の番組で歌っていました。“sayonara”という映画もＤＶＤが出ていたので注文しました、１２５７円。またここで横道にそれてしまいました。１９５７年12月に公開された映画で、ちゃんと京都や東京でロケしていますので当時の日本の風景や市民生活も見られます。朝鮮戦争の兵士が日本配属となり歌劇団の女優に恋をするラブストーリーです。この時代に日本を描いた作品としてはかなり良心的だそうです。それでも当時この映画を見たら西洋から描いた日本の違和感を感じたかもしれません。ただ今の自分が見ると、違和感よりも１９５０年代の日本はまだまだ昔の風情が沢山残っていて、そうだ小さい時はこんな感じだったなーと思い出してしまいました。

こんな感じで横道にそれつつ音楽ＤＶＤを探してみましたが、今はYouTubeがあるので、見たいなという部分だけカットして出していたり、作品によってはまるまる出てくるのもあります。まずはYouTubeで検索して見て全部見たいと思ったら購入するのが良いと思いました。

そしてこの音楽ＤＶＤ探しはこれからも続けていきたいと思います。

特集　コロナ小休止　少林寺拳法シニア流山健康クラブ

Outsiderの映画事情

門屋 大二

映画は世情の機微を敏感に映す鏡と思う。国際問題ではロシアの有無を言わせぬウクライナ侵攻等通常では考えられない非条理がまかり通っている。司馬遷が「史記」を構想・執筆中 終生問い続けた疑問「天道是か非か」が 長い歴史を経由して今尚現代の混乱した世情を見通している様で「一向に進歩しない人間世界」の行く末を 強く危惧して 今なお「焦点を当てるべき問題」として 指摘しているかと思う。

英国王室ではエリザベス2世の崩御・チャールズ3世の戴冠式があり皇室を取り巻く事情が忙しく展開する中英王室事情を歴史的に細部にわたって紹介する長編映画「クラウン」を逐次鑑賞している。政界・各界の大物と日々堂々と女王として接触するために努力し成長する過程が詳細に記録され魅力的作品となっている。時の首相として英国を率いたチャーチルの演説も随所に織り込まれておりその一国のリーダーとしての言葉の力強さと説得力の強さを改めて感じさせる。以前からチャーチルが演説で使用する言葉の圧倒的な迫力を他言語を学ぶものとして有効な材料にしていたが本シリーズを辿るにつれその魅力を再認識した次第である。「クラウン」・政界・貴族社会・一般社会状況を織り交ぜて紹介するこの長編を「言語学習の素材」としても興味深く見続けることになろう。

少林寺拳法流山健康クラブには「COVID-19」の蔓延以来 身内の医者の強いアドヴァイスで出席出来ていない。少林寺拳法の師弟 石井先生と関田さんは映画愛好者としても 有名で石井先生・関田さんの間で交わされる「映画話」は 映画outsider にとって 「各種ヒント」を得る貴重な機会である。流山市のＮＩＦＡ（流山国際交流協会）にご縁がありオレゴン州出身の理科大のDarnell Watson （石井先生の親しい友人）先生の英会話教室で授業を楽しんでいる。彼女は無類の映画好きで映画の逐一を認識しその方面の見識は「専門家」の域にあると思われる。授業中「映画中の英語」にも屡々触れ 生徒の興味を掻き立てている。私事 この影響を受けてJohn Grisham 原文（「Pelican Brief ペリカン文書」）の解読に気合を込めて取り組んでいる。著者は 行毎にパラグラフ毎に 頁毎に サスペンス・ミステリーの謎解きのヒントを鏤めており読者は細心の注意を払い 「宝探し」の様に key-word に着目する。原作に惹かれる所以である。原作の英語表現と映画で表現される情景・台詞を興味深く対比すると言う私にとって 新しく面白い 景色が 開けた様に思う。英語学習初心者として未経験の面白さを体験中である。

中国で日本のアニメ映画が大流行と報じられている。中国社会がゼロコロナ政策の徹底でやや経済が疲弊・低迷し 一般社会が巣籠り勝ちになり中国映画界も衰退傾向と風評される最中日本のアニメが活性剤として働き「スラムダンク」・「雀の戸締り」等が大ブームとなっており勢い社会が息を吹き返す一つの契機となろうと言う見通しも伝わって来る。日本の漫画映画製作技術・know-how が 中国製のアニメ映画の発展・普及に生かされていると言う。有望な可能性として歓迎される。大人・子供を含む中国社会各階層でアニメ映画が共感を得て社会を活性化させる好循環の一要素になろうとのこと。何かと行き違いの目立つ両国関係を考えるとこの好循環の更なる発展が必ずや改善に向かう一助になる様に 願うばかりである。

「シネマ気球」の執筆資格を自問しながらも関田さんのお誘いに感謝しつつ世情に目配りしつつ世情を映す最近の映画事情をOutsiderなりの触覚で辿って見たい。

ナワリヌイ：反体制派の姿勢を維持しプーチン政権に大胆不敵にも対抗しその深い闇を暴こうとするナワリヌイを襲った暗殺未遂事件の恐るべき過程を追求する作品。ロシアの暗闇で展開する正義と暴力の暗闘が世界に照らし出される。スリルとサスペンスに満ちた話題作。事実かフィクションか 世界中で議論沸騰中である。暴力の横行に翻弄される正義の脆さが強調される。時節柄 世界の関心事で鑑賞したい映画の最右翼にある。

クラウン：英国のエリザベス２世の治世を色々の角度から映し出している。女王が日常多忙に接触する政治家・学者・経済界・・各界各層と対等に交流するためには自らの「一般教養不足の自覚」を痛感し家庭教師を求める挿話は共

感を呼ぶ。各界の権威者と対等に気おくれなく接触したいと言う望みを持ち家庭教師に学ぶ事に意欲的な女王の姿は正しく王道か。冠式以降派生する母娘・姉妹間の根深い波風。国連邦を女王として訪問した際の大変な歓迎ぶりは大きな自信となる。英国の競馬は独特の高貴な風土。女王としてこれに臨む姿は「学ぶこと」を重視する女王の姿勢の一端か。Churchillの肖像画が一端描かれたが紆余曲折の後結果的に消失した事件は如何にもChurchillの個性を伝える挿話で消えた名画として人々に記憶されている。エジプトのナセル大統領と英国首相イーデンとの国際情勢・アスワンハイダム・スエズ運河をめぐる緊張感ある相克や女王姉妹間の英国国教会と結婚をめぐる諍い・女王の父親との誓いを破り王女としての大義を選択しながら苦悩・成功誤算の入り混じる国としての大航海を英国・国民・国家指導者・「クラウン」が共に進める過程が克明に描かれ鑑賞するものを魅せる大作と思う。

Pelican Brief・John Grisham

スリルとサスペンスが展開する原作を読むこと映画を鑑賞することの対比は映画outsiderを自覚しつつ言葉を学ぶ者にとって更に興味深いもとなっている。原作者が要所要所に鏤めた謎解きのkey-wordを見逃すことなく細心の注意で筋書を追う。本文と映画の両面から観賞する面白さは映画を楽しむ一つの方向かとも思う。法律学校の秀才女生徒が問題含みの判例記録を解析し一連の疑問を関連づけて国家ぐるみ・経済界ぐるみの「暗部に光を当てた報告書」を書き教授に提出しこれがＦＢＩ・ＣＩＡ・ホワイトハウス要人の目に留まりこれが明るみに出ることを避けたがる一派から命を狙われる逃走劇となる。報道記者との協力関係も次第に確固たるものになり助け合って「国家犯罪」を暴き逃走にも成功する。環境汚染弱者のペリカンの生息地を守れるか。多種・多用の法律用語に悩まされつつ解読途上である。

サイコ：人間の深層心理にある不安を種々の角度から描き思わぬ展開に驚かされながら殺人過程が明らかにされて行く。幕開けの音楽・サスペンスに流れる音楽は独特でヒッチコックの雰囲気に誘う。不気味な風景と音楽・登場人物の不安の表情・・サイコサスペンスの真骨頂か。見る人をハラハラ・ドキドキ・恐怖・吃驚仰天の渦中に見事に引き込んで行く。全ての場面が見事に連携して進行するヒッチコック色満載の映画を堪能した次第。

女王陛下の００７：スイスアルプスのアレルギー研究所に隠れてウイルスを培養し集団催眠等ありとあらゆる手法を駆使して世界を震撼させる悪の集団に挑む００７。主な舞台はスイスリゾートで展開。アルプスをヘリコプターで飛ぶ際の素晴らしい雪景色。スキー大滑降・ボブスレー・冬スポーツ満載の手に汗握る追撃・逃亡劇は居ながらにしてヨーロッパアルプスの素晴らしい景観を楽しめる娯楽作となっている。

第76回カンヌ国際映画祭「Perfect Days」で役所広司が主演男優賞受賞。日本の役者が世界の映画界の数ある役者の中から選ばれたことは日本映画界にとっても久々の明るい話題となっている。

映画音楽に輝かしい足跡を残して坂本龍一が惜しまれて逝去。「戦場のメリークリスマス」(Merry Christmas, Mr. Lawrence)・The Last Emperorに聴く斬新・気鋭の音楽は多くの人の耳に残る。

世情の一側面に未だ予測できない危険を含んだまま社会が無免疫状態のままソーシャル・メディアが清濁併せ飲んで無責任状態で暴走している。ＳＮＳは事実・虚偽を混淆したままで放置され迷走している。世の中の見張り番はこの状態を危惧しＳＮＳの真偽を判別する確かな法と秩序の徹底の必要性を喫緊の課題として警鐘を鳴らし続けている。混乱・無謀・不安定要素が随所に表面化しているのは発展・革新激動期には避けて通れない試練かとも思う。

更に目立つ世情の一端にＡＩ事情がある。囲碁に「Leela」と呼ぶappがある。膨大な対局データを記憶しあらゆる着手・手順を「勝利すること」に向ける。さらには時と場合に応じた最善手を示すことが出来る。最右翼の棋士も叶わない実力をしめす。ＡＩが膨大なデータを駆使して映画を自在に支配する姿が現実味を帯びて迫って

いる。映画の知的所有権如何？映画の将来とＡＩを考えて不明にも懸念とも希望ともつかず案じつつ筆をおく。今年も一夜漬け・発散型の思考に終始したシネマ気球投稿。反省頻り。謝謝。

男はつらいよ！ 義理と人情と男らしさ！

杉山昇

関東平野を流れる河の水量は豊かで、その土地を裕福に育てている一つに江戸川！がある。利根川の分流で旧江戸川河口から約60㎞、東京湾に流れ着く。流域は茨城、埼玉、千葉、東京の1都3県。そのほぼ中間地点に千葉県市川市と東京都葛飾区を結ぶ渡し船がある。「矢切の渡し」である。以前は船頭さんが櫓で船を操り向こう岸に渡したが、今は船外機であっという間に対岸に着いてしまう。当時の情緒は全くなくなっている。

岸に着く。土手を上がり車が意外と多い道路を横断する。何となく葛飾柴又寅さん記念館を見る。懐かしい昭和のものが並んでいた記憶がある。帝釈天題経寺（精緻な彫刻がそこかしこに飾られている）という日蓮宗のお寺へ。ボランティアさんが正面の本堂より右手の方が古い本堂だと教えてくれた。

「男はつらいよ」シリーズの筋書きは決まっている。柴又でおいちゃんやおばちゃんまた妹のさくら等と喧嘩をしてプイと旅に出る。旅先で必ず超美人のマドンナと意気投合するが、今一歩寅さんは踏み込めず、「何か困ったことがあればこんな俺でもいいなら東京は葛飾柴又『とらや』を訪ねろ。そこには優しいおいちゃんおばちゃんがいて必ず面倒をみてくれるから！」と言い伝えて別れる。それもいつしか片思いで恋に破れる。そして悲壮な思いでまた旅に出る――。

「男はつらいよ　旅と女と寅次郎」。50作まであるらしいが、私が印象に残っているのが31作目のこの作品。都はるみとの共演である。寅さんの商売は的屋。新潟に向い、出雲崎へ来た。遥かに見える島が佐渡島。漁船の船頭に頼み自分も一緒に連れて行ってくれないかと頼む。すると、近くで様子を見ていたどこかワケがありそうな女性が同乗させてくれないかと頼む。女性は人気歌手「京はるみ」で、過密なスケジュールと失恋の痛手から逃れようと突如思い立ち無意識のうちにホールから逃げてきてしまったのだ。そんな彼女が誰か気づかないまま、自分の船でもないのに快く同乗させてあげる。その二人の姿を通りがかりの二人の男性が見て、一人が出て行く船を見ながら「ほら！あれ！京はるみ！だろう」と体で示す。男性の何気ない仕草で「京はるみじゃないか」の表現が実にうまく出ていた。今でも強く印象に残っている。

佐渡に着いて寅さんたちは宿で酒を酌み交わすうち、「はるみ」をどこかで見た顔だと思うが思い出せない。はるみが身の上話をしようとすると、「ワケのありそうな女の一人旅、くどくど身の上話を聞くほどの野暮じゃねーよ！」と寅さんは男気で遮る。宿の女将のおばあちゃんからサインをもらってくれと言われ、老婆の持っていた写真から京はるみだと初めて知る。だが！はるみの気持ちを考え、知らない振りを通す。このときのうまさはさすが渥美清ならではの演技である。

渥美清が都はるみの大ファンということでマドンナに迎えられたように聞いていますが、京はるみ（都はるみ）が人気演歌歌手という設定で、お決まりのドラマが設定された。特にはるみさんとの共演で嬉しそうな渥美さんがよかった。都はるみさんの歌唱力に負けない渥美さんの歌（心）も良かった。冒頭の夢のシーンは、今回の舞台となる佐渡金山での時代劇。それぞれの役者に割り当てられた役がそれっぽくておもしろかった。寅は佐渡金山の一揆の首領「柴又の寅吉」、柴又村のさくらの家に寄り金（きん）を渡すが、さくらの夫博吉は岡っ引きになっていて、その縄に縛られて…。歳をとればとるほど、都はるみさんの魅力はやはり「こぶしの効いた歌」。「男はつらいよ」シリーズも同様に、歳のせいか、或いは時代が変わったせいか？遅れたせいか？わかりませんが、この作品にパッケージされている昭和の風景や人情のかけがえのない大切さが身に沁みます。「京はるみ」という芸名は、都はるみさんの芸名候補の一つだったそうですね。

×　×　×

「サバイバルファミリー」――生き延びる術を身につけよう

中田好美

ここ数年、なんだか太陽の光が熱くて1年中紫外線も強い気がする。特に今年は1日の気温差も激しくなり、日中が夏で夜は秋冬のような寒さである。太陽には活動周期があり、およそ11年の周期で黒点（太陽表面に現れる黒い点）が増減し、変動を繰り返している。活動周期の終わりとなる黒点数が極小となるのを境に、その前までがラニーニャ現象（気温が平年より夏は高く冬は低い）、その後からがエルニーニョ現象（気温が平年より夏は低く冬は高い）となる。この現象のバランスがどちらかに偏ると、世界で異常気象が発生しやすくなるという。活動周期が活発になる黒点が増えると、太陽フレアと呼ばれる爆発現象が起きる。放射線や電磁波などが太陽風として地球に到達し、磁気嵐を起こす。今までも過去に大きな太陽フレアが発生しているが、幸運なことに地球への影響が少ない位置で起きていたため、文明崩壊するようなことにはならなかった。２０２０年から新しい太陽活動（サイクル）が始まり、まだ3年も経っていないが、今年に入ってからこの太陽の動きが今までにないほど活発になっている。予測されている２０２５年よりも早く、地球へ大きな影響を及ぼす太陽フレアが起きるのではないかと不安視されている。実際にこのような現象が起きてしまったとき、今の暮らしがどうなってしまうのか、そちらを題材としている映画を借りてみた。

鈴木家は家族四人で暮らしているが、それぞれ自分のことに夢中で、お互いにあまり関心を持っていない様子。光恵（深津絵里）は、父である重臣（柄本明）から鮮魚や野菜が送られてきても、あまり嬉しくなさそう。魚を捌くのが苦手であったり、無農薬ならではの虫の付着に顔をしかめる。魚を捌いてと旦那の義之（小日向文世）に頼んでも「俺はいいよ」の一言。娘の結衣（葵わかな）はスマホに夢中で、送られてきた鮮魚や野菜に「う～え、き～も～！」と嫌悪すら抱いている。息子の賢司（泉澤祐希）はファストフード片手にヘッドフォン爆音で帰ってくるなり、挨拶もせずに自室へ入ろうとする。「おーい、何か言うことないのか？　まったくお前……ウチに飯があるのに、なんでわざわざそんなもん食ってくるんだ？　バカかお前は」と義之は目くじらを立てる。そのように言われるものだから、賢司はムッとしながらさっさと自室へ入っていくのであった。一緒に暮らしてはいるが、互いに顔を合わせることなく、別々のものを別々に食べるという日常を送っていた。

1日目

義之が目覚めると、枕元の時計が3時過ぎで止まっていることに気付き飛び起きる。電気やガスが止まり、スマートフォンも動かない。家全体の異変とともに、慌ただしい朝を迎える。ライフラインが止まってしまっても、皆一様に通勤や通学を第一に考えている様子が、勤勉な日本人らしいなと感じた。

義之や子供たちは通勤や通学に遅れないよう、ばたばたと玄関を出る。マンションのエレベーターも止まっているため、高層階から階段で降りていくが、かなりしんどそうだ。義之が駅に着くと、電車、バス、タクシーも動かない。徒歩で職場にたどり着くも、要となるＰＣが動かないため仕事にならなかった。同僚である亮三（宅麻伸）から帰宅指示が出て、その帰り道に自転車を購入した。機械で動くものが全て駄目になってしまったとき、自転車の便利さを痛感するシーンであった。家族分はなかなか難しいが、一家に一台あると移動手段として重宝しそうだ。

義之がマンションの階段を登っていくと、おばあさんが辛そうな様子で座っていた。「大丈夫ですか？」と声をかけると、苦しそうな呼吸とともに、うんと小さく頷いた。何かしらの理由で体を思うように動かせなくなったとき、階段移動という大きな困難も立ちふさがる。

賢司の大学や結衣の高校も自習となり、先生たちも忙しそうにしていた。

光恵は食料を求めてスーパーへ行くが、レジが使えずそろばん計算のため長蛇の列となっていた。全ての商品を機械が記憶しているなか、商品の値段が瞬時に分からないという大変さは計り知れない。実際にレジが止まってしまったら、売り場と会計を行き来しながら値段を調べるのだろうかと想像してしまった。このような時はクレジットカードも使えずＡＴＭも止まっているため、現金がいかに重要かが分かる。停電初日は数日で復旧するだろうと、人それぞれの行動の違いで明暗も分かれそうだ。

３日目

義之は仕事先から電気が復旧するまで自宅待機との指示があり、亮三は家族とともに東京から離れることを決意していた。「お前だって、家族のことが心配だろう？　このまま東京にいたら、危ないぞ」仕事にならず不服そうな義之に言い聞かせ、水を確保できる山を目指し、キャンプ場へ移動することを伝えた。義之は帰り道、現金確保のため銀行に並ぶが、一人の引き出し額が10万円までと制限されてしまう。我先にと押し寄せた人々にもみくちゃにされ、倒れ込んで鼻血を流す。人々の焦りや不安、苛立ちが伝染していた。現在では電子マネーを利用する人も多いので、もし大元のデータが消えてしまったら、そのお金は無に帰してしまうかもしれない。

光恵は浄水場に飲み水を求めて列に並ぶが、施設全体が動かないため水の配給はできないと言われてしまう。何にしても最悪の事態を想定しながら、水や食料もできるだけ多めに用意せねばと思った。

７日目

スーパーの商品は底を突き、復旧のめども立たない。先行きの見えない不安から、マンションに残っている人々で今後の対策について話し合いとなる。食料を分け合いながら、空き家となったマンションが荒らされないよう、みんなで守っていこうという結論になった。話し合いの場に置かれた灯油ストーブの火は、今にも消えそうであった。

義之と光恵が自宅に戻るため階段を登っていると、葬儀の最中である一室があった。その部屋は以前、義之が階段で声をかけたおばあさんの部屋であった。二人はその様子を見ながら不安はピークに達し、光恵の田舎である鹿児島へ行くことを決意する。

環八を利用して自転車で羽田空港へ向かい、飛行機に乗って鹿児島を目指す計画を義之は立てる。航空代金のためにみんなのお金を集めるが、これで足りるのか不安な顔をする義之。そこへ光恵が貯金箱やへそくりを持って登場し「これ、なんかあった時のためにとっといたの」そのお札の束に、みんなロをあんぐりと開いた。危機感があまり感じられず、ぼーっとしているように映る光恵であったが、家族を想いしっかり蓄えていた。

翌日早朝、静かにマンションの部屋を出て、自転車で羽田空港へと移動を始める。道中の店舗では、５００㎖の飲料水が１０００円で売られていた。その様子を横目で見ながら「だめだ、だめだ！　あんなぼったくり！」義之は顔をしかめる。先へ進むと、２０００円、２５００円と高騰していく。次にたどり着いたお店でも一本２５００円という値段であった。結衣に「やっぱ最初のやつ買っておけばよかったじゃん！」と強く言われ「あぁ、いや、もうちょっと行けば安いのがあるかも……」と義之は返すが「もっと高くなるかも……」賢司は不安そうな顔をした。すると光恵が家族のために一芝居打つ。

「さっきのお店じゃ１本５００円だったわよ～」「うちは今この値段でやってるんで……」「あなた、これじゃいつまで経っても売れないわよ。これ全部買うから一本６００円にしてよ、ねっ？」素知らぬ顔で値切り交渉成功。普段からこのような話術で節約しながら、少しずつお金を貯めたのだろうなと垣間見えた。休憩しながらやっと羽田空港に到着したが、飛行機が動かないため道も封鎖されていた。このまま自宅に戻っても仕方がないので、自転車で鹿児島を目指すことを決心する。

翌日、賢司と結衣は無人のブックオフに立ち寄ると、地図コーナーに向かう。詳しい地図は残っていなかったため、小学校の授業で使うような地図帳を手に取り、鹿児島まで一ヶ月近く掛かることを知る。

一方義之たちは、運良く外に置かれた古い自転車を見つけ、譲ってもらおうと米穀店へと入る。そこには店主富子（渡辺えり）に米を譲ってもらおうとする人々が並んでいた。クーラーボックスを持った男性は鯛一匹と米一合をやりとりし、次に並んだのはブランド品に身を固めた男性。腕時計を置

き「ロレックス、本物だよ」と交換をお願いするが「そんなの何の役に立つの」と言われ、続けて高級車マセラティの鍵を置くが「帰んなさいよ！」と一蹴される。後ろに控えた人も骨董品やブランド品を持ってきていたため「そんなの腹の足しにならないでしょ！」と帰らせる。義之たちは自転車を譲ってもらおうと水を1本差し出すが、富子は「う～ん」と悩ましい様子。その雰囲気を察した光恵は、大事に持っていたお酒を1本取り出す。満足げな店主に、違うお酒をもう1本差し出し「これであのお米も」と、自転車と10キロの米を手に入れることができた。

光恵は大阪から向こうは停電していないという噂話を聞き、賢司たちと合流して自転車を進める。ところどころ行き止まりがあり、地図も詳細までは書かれていないため道に迷ってしまう。思うように進められずイラつく三人に対し、光恵は頭上を走る東名高速道路を使ったらどうかと提案する。インターチェンジから入っていくと、西へと移動する人々であふれていた。その様子に希望が湧き、義之たちは足を早める。

海老名サービスエリアまで進んだところで日が暮れたため、初めて野宿することになった。身を寄せ合い眠っていると、義之と賢司は寒さでふと目が覚め、水を盗もうとする男性と目が合った。義之に「何やってんだよ！　捕まえろよお前！」と言われ賢司が後を追いかけると、トンネルの入り口付近で休む家族の姿があった。その男性には幼子がいて、盗まれた水で母親がミルクを作っていた。懸命に追いかけた賢司であったが、その様子を見て静かにその場を後にした。この男性は申し訳なさそうに盗んでいたが、もし相手がなりふり構わない状態だった場合、野宿で身を守るのは難しいなと感じた。

16日目

道中の川で洗濯をしたり、ご飯を食べたり各々身体を休めていた。義之は最後の飲み水を飲み干し、乾きが満たされなかったため川の水をそのまま口にしてしまう。移動中に強い雨風が襲い、自転車は壊れ、貴重な米も散らばってしまい踏んだり蹴ったり。義之も川の水がたたり、体調を崩し倒れてしまう。普段から口先だけで文句が多く、思いやりに欠けることが多々ある義之。大変な状況でも子供たちからは渋い顔をされていて笑ってしまった。光恵が看病している間に賢司と結衣は食料を探しに行く。見つけた店内で自転車の修理用品、精製水、猫の缶詰、発煙筒を手に入れることができた。精製水は飲み水にもなることを初めて知った。その時店舗にあるかは分からないが、頭の片隅にいれておきたい。

22日目

猫の缶詰を黙々と食べ、思っていてもみんな口にしないでいるのに、義之は「まずい」と不満を漏らす。先へ進むと、何やら楽しげな様子で休憩する斎藤一家と出会う。鈴木家とは対象的で、父敏夫（時任三郎）は、妻の静子（藤原紀香）、長男涼介（大野拓郎）、次男翔平（志尊淳）から尊敬されている様子。トランプをしながら温かい飲み物やドライフルーツを食べていた。賢司が食料について尋ねると、山の湧き水をペットボトルに貯めたり、魚や果物を干したりして食料を確保しているとのこと。生き延びる術を家族で理解していると、不安や恐怖に襲われることなく、楽しむこともできるのかなと感じた。翔平は義之たちに対し「こっち向いて」と声を掛けると、カメラのシャッターを切った。昔ながらのフィルムカメラは使うことができるようで、いつか復旧した際に送ってもらうことを結衣は約束した。

義之はキラキラとした一家に嫉妬したのか、猫の缶詰のラベルをはがしたり、無くなった飲み水をあるように見せかけたり、あらゆる見栄を張ろうとする。途中まで一緒に移動することになったが、移動中ずっと眉間にシワを寄せて、その面白くなさそうな姿に吹き出してしまった。途中で徒歩移動する自衛隊員と出会い、敏夫は現状を聞いた。福井の発電所が原因不明でフリーズしているため、様子を見に静岡へ向かう途中であった。結衣は大阪は停電していないのか尋ねるが「我々には分かりません」と言われる。斎藤一家と別れ、義之たちはひたすらペダルを漕いでいく。

43日目

当初の目的地である大阪に到着したが、ゴミが散乱し電気どころか人も居なかった。希望を持ちながら辿り着いた先がこの有様で、感情が爆発し言い合いになる。

「もうやだ!! お父さん言ったよね！ 自転車は大阪までって、言ったよね!?」

「俺がいつそんなこと言った」

「どうすんの!? もう食べ物も水もないんだよ！ お風呂は入れないし、着替えられないし、頭痒くて死んじゃうよ！」

「そんなもん、俺のせいじゃないだろう」

「ほら！ また責任逃れ。俺についてくれば何とかなるって言ったでしょ！ 言ったよね!? 嘘つき!!」結衣の我慢は限界に達し、日頃の鬱憤も込めて吐き出した。

「親に向かってなんだその口の利き方!!」堪らず義之も言い返す。

「だったら親らしいこと、一つでもしてみろよ！ 偉そうなことばっか言って、なんもできねぇじゃん！」いつも言い返さずに、言われるがままの賢司も続いた。

「なんだと!?」

「もう、いいかげんにしなさい!! そんなこと、とっくに分かってるでしょ!! お父さんは、そういう人なんだから!!」言った後に（あっ……）という光恵の表情が絶妙で面白い。いつも優しい光恵の一言や、子供たちの本音が義之の心に刺さり、うなだれてしまった。

心身ともに限界で、お腹もすいて仕方がない。とある場所では、カニや魚を用いた炊き出しが行われていた。どこに食材があったのだろうと、ふと目をやると、そこは須磨海浜水族園であった。設備が停止して生命維持が難しくなってしまったこともあり、それなら尊い命をいただこうというわけだ。水族園は緊急時に食料宝庫にもなるのかと、見方が変わった瞬間である。義之たちは配給の列に並ぶが、直前でなくなってしまう。義之は炊き出し人の足にしがみつき「この子たちの分だけでもいいですから、お願いします！ お願いします！」と土下座をする。涙ぐんで懇願する義之を光恵たちはそっと立たせた。社会の荒波にもまれ、時には土下座をしながら生き抜いてきたのだろう。時間とともに変わってしまった、義之の性根が表れた瞬間であった。

67日目

僅かな気力体力を振り絞り、畑道をゆっくりと進んでいく。休憩していると豚の鳴き声が聞こえ、みんなで協力して捕まえようと走り回る。義之は格闘の末、見事仕留めることに成功。けれど、そこから先の捌く作業ができずにおどおどしていると「なにをしとんがや！」と、通りかかった善一（大地康雄）に声を掛けられる。義之たちの代わりに豚の血抜きをし、手押しの台車を用意してくれた。善一の自宅まで運ぶと、そこには井戸水もあり鶏が庭を歩いていた。義之たちは井戸水のポンプを押し、代わる代わる水を飲んで乾ききった喉を潤す。

「養豚場の電気柵がわやになって、みんな逃げてしもうたがなぁ」

勝手に殺してしまったことを謝罪する義之に「代わりにいうてもなんじゃけど、逃げた豚捕まえるのを手伝ってくれりゃあ、こらえちょっても（我慢しても）ええがのう。やるかぁ？」義之たちは顔を見合わせる。続けて「腹、すきよらんか？」の一言に生唾を飲み込んだ。漬物、ほかほかの白米、目玉焼き、豚の燻製などが振舞われ、その温かい食事の数々に結衣は涙を流しながら食べていた。

　たらふく食べた後は、豚の解体作業が始まる。魚も捌けない一家にとって、目の前の光景は地獄絵図のよう。吐き気を我慢しながら捌き方を教えてもらい、大きな肉塊から食べやすい切り身にして、塩をまんべんなく振り漬物容器に保存していく。土間の下で一週間ほど寝かせ、それから燻すという。一頭の豚を解体する作業量はなかなかのもので「大仕事ですね」と義之は話す。「一人じゃえれぇけど、こんだけおりぁ、わけはねぇのぅ」善一は目を細めながら嬉しそうに返した。賢司と結衣は水の入ったバケツ運びを頑張り、夜は五右衛門風呂に浸かることができた。新しい寝巻きや布団も用意され、一家は久しぶりにあたたかな夜を過ごした。

　翌日、みんなで泥だらけになりながら、逃げ出した豚を全部捕まえると、顔を見合わせ笑いあった。達成感に溢れたその表情は、キラキラと輝いていた。薪を作ったり、自転車を修理したり、各々の時間を過ごしていると「あんたらがよけりゃ、ずっとここにおってもろても、ええんじゃけどのう……」と、善一は思いを伝える。そのあたたかさを受け止めながらも、鹿児島にいる光恵の父が心配で、義之はみんなの同意を得て鹿児島へ行くことにする。自転車の籠いっぱいに水や燻製肉、梅干しなどの食料を持たせてくれた。先行きの見えない不安な道中で、このような優しさと出会えたのなら、とても幸せなことだと思った。

　忙しさにかまけて、家族との時間を過ごしてこなかった義之。先頭で「頑張れ！」と声を出し、黄金色に染まった畑道を四人で漕ぐシーンは、とてもあたたかかった。家族との時間を過ごしたくても過ごせない人々が、どれほどいるのだろうとふと考えてしまい、じんわりと涙がこぼれた。

　義之は率先して行動するようになり、川という困難が立ちふさがっても、歩みを止めずに解決策を考える。材料を集めて筏を作り、家族と荷物を渡らせようと奮起した。渡っている最中に強い雨が降ってきて、三人が渡りきったところで荷物が崩れ、必死に泳ぐ義之の顔を塞いでしまう。そのまま増水した川に流され、助けることができなかった。光恵と結衣は泣き崩れ、賢司が見つけ出せたのは、義之が大事にしていたカツラであった。

94日目

　悲しみで歩みを止めようとする光恵の手を取り、賢司はしっかりと支える。こんなときだからこそ、栄養をつけねばと肉を頬張る賢司と結衣。結衣が肉を食べていると、匂いにつられ野犬が近づいてきた。ちらつかせると隙を突かれ、持ち去られてしまう。程なくして、野犬の群が結衣たちの後を追い、肉の入った光恵のカバンに向かって喰らいついてきた。急に背後を襲われた光恵は斜面を転がり落ち、足を骨折してしまう。野犬を追い払おうにも身一つで武器もない。しゃがみ込んで子供たちを抱き寄せると、じりじりと犬たちが距離を詰める。もうダメだと思った瞬間、機関車が少し先からやってきて、汽笛の音に驚いた犬たちは一目散に逃げていった。石炭などの可燃物を動力とする機関車は、壊れることなく動いていたのだ。

　光恵は乗り合わせた医者に手当てをしてもらいながら「ほんで、お父さんは？」とふいに聞かれ、感情が込み上げた三人は涙を流す。手当が終わり、光恵がぼんやり外を眺めていると、煙が立ち上っているのを見つける。機関車を急いで止めてもらうと、賢司と結衣は煙のもとへと駆けつけた。溺死したと思われた義之はなんとか生き延び、息も絶え絶えであったところに機関車が走っているのが見えたのだ。賢司に渡されていた発煙筒を力を振り絞って使い、居場所を知らせることができた。車内で安堵した一家は、夫婦の馴れ初め話をしたりして穏やかな時が流れる。機関車はトンネルを通る際、窓を閉めなければならないが、義之たちは閉め忘れてしまう。トンネルを抜けるとみんなの顔がすすだらけになってしまい、お互いの顔を見ながら車内は大爆笑。昔はこのようなハプニングもあったのだなと、今ではなかなか見られない人同士の距離の近さに、心があたたかくなった。

１０８日目

あらゆる苦難を家族で乗り越え、喧嘩しながらも支え合い、やっとの思いで鹿児島へと辿り着いた。海で釣りをしていた重臣を見つけ、四人はとびきりの笑顔で駆けつける。ライフラインが途絶えてから１０８日目にして、長い長い旅路は終点を迎えた。

２年と１２６日後

義之と賢司は漁で魚を採り、そこに暮らす人々と助け合って生きていた。結衣は織物を学び、光恵は畑で野菜を育てていた。翌朝、義之は荷物置き場から聞こえてくる時計のアラーム音に気がつく。時計が動いたことに驚いていると、町内放送も流れ、ライフラインが復旧した瞬間であった。

一家は東京へと帰り、仕事や学校というかつての日常に戻る。以前と違うのは、お互いに顔を見ながら会話して、光恵は魚を捌き鯖の煮付けを作れるようになった。賢司はギターを持ち、結衣は綺麗な織物を作っていた。義之は自転車通勤へと変わり、忘れかけたお弁当を取りに戻った。そこへちょうど郵便の配達があり、その手紙にはあの日撮られた家族写真が入っていた。険しく不安げに映る写真をそれぞれ見つめるが、その表情は明るく、一緒に乗り越えた苦難の日々が土台となり、力強い一歩を踏み出すのであった。

「いつか誰かが、きっと助けにきてくれる」あらゆるものが停止した世界で思考まで停止させてしまうと、決して生き延びることはできない。日頃からの備えとともに、生き延びる術（知識）を身につけなければと思った。食料の他に、自転車、地図、野草図鑑、生き物の捌き方、応急処置の本などもあった方がいいと思った。火のおこし方も知っておけば、いざという時に生き残れるかもしれない。

太陽フレアが発生してから磁気嵐が地球に届くまで、1日〜3日ほどの猶予がある。電磁波から精密機器を守る方法をいくつかご紹介。まずは電子レンジを使ったファラデーケージ（導体に囲まれた空間）の作り方。コンセントを抜いた電子レンジを用意し、レンジの内側から扉全面、側面、背面の穴を塞ぐように、アルミホイルと導電性アルミ箔テープを併用して密閉させる。少しでも隙間があると効果はなくなってしまうので注意が必要だ。中にしまうものは段ボールなどに入れ、レンジと直接触れないようにする。スマートフォンやラジオをレンジ内に入れて、着信やラジオ受信を遮断できたら、ファラデーケージの完成。完璧なものではないが、磁気嵐が起きた際に少しでも影響を和らげることができたら、故障せずに済むかもしれない。興味のある方は動画も公開されているので「ファラデーケージ電子レンジ」と検索してみてください。一番簡単なものでは、アルミホイルで保護したいものをぴったり包むと電磁波を遮断することができる。キャットフードのアルミ製パッケージでも防ぐことができたので、家庭にある利用できそうなものを試してみるのがおすすめです。いずれも隙間のないよう密閉してから、地面と直接触れないよう段ボール箱などに入れるのを忘れずに。

情報化社会となり機械と切り離せない生活の中で、田舎暮らしを選択する人が増えている。政府に任せていても農業や畜産業など、命に関わる重要な物事が一向に改善されない。それどころか食料危機を意図的に造り、昆虫食を食べさせようとする始末だ。狂った世の中で誰かに頼るくらいなら、自分のことは自分でなんとかせねばという意識が強まっているのだろう。我が家では兄が色々な家庭菜園に挑戦しており、白菜やにんにく、馬鈴薯なども収穫することができた。コンパニオンプランツ（共生植物）という育成方法で、違う種類の植物を一緒に栽培することで、病害虫を抑えることができる。無農薬で野菜を育てられるので、人にも自然にも優しい。人は本来自然に優しい生き方をできるのに、コストや利権など様々な困難が重なり、農薬という手段を取らされている。庭でできた白菜を初めて食べたとき、満ち満ちた大地のエネルギーを感じた。甘くてみずみずしい、まるで果物のような味わいにとても感動したのである。日々の水やりや土壌改良、陽のあたる場所へと移し替えたり、植物の声なき声を聞いて正しく応える。手塩にかけたその愛情に、呼応したかのような味は忘れられない。太陽フレアであらゆるものがリセットされてしまったとき、かつての人々の日常であった、畑を耕し種から命を育むという生き方が尊ばれるのかもしれない。

×　×　×

心に響く手話の歌声『CODA（コーダ）　あいのうた』

久保嘉之

一

ルビー・ロッシ（エミリア・ジョーンズ）は、ハイスクールに入学したての、多感な乙女である。朝まだきの三時起床、海が時化（しけ）ていない限りは毎日登校する前に、父親フランク（トロイ・コッツァー）が舵を取る漁船に兄レオ（ダニエル・デュラント）と共に乗り込み、漁の手伝いをする孝行娘でもあった。乗組員は三人だけ。漁獲制限もあって水揚げは少なく、とても人を雇う余裕はない。だがルビーが船に乗り込むのは、父と兄を手伝って家計を助けるためもあったが、そうせざるを得ない理由があったのである。父も、只一人の兄弟である兄も、家で留守居をする母親ジャッキー（マーリー・マトリン）も、即ちルビーを除くロッシ家の家族全員が、音のない世界で暮らしていたからである。彼女だけが健聴者であった。――耳が聞こえない人が操船するためには、特定の条件を満たさなくてはならない。無線は勿論のこと、警笛・霧笛が聞こえないとあっては、危険を察知する能力が、著しく限定されてしまうからだ。故に耳の聞こえる乗組員が、必ず乗船していなければ、ならなかったのである。

物語は、大海原のシーンから始まる。次いで画面左側、洋上に小さく頼りなげに浮かぶ、一隻の停泊した漁船。父親の持ち船「アンジェラ・ローズ号」である。カメラが寄ると、甲板では今しも網が引き上げられたようで、三人共に作業に余念がない。カセットレコーダーから大音量で曲がながれ、ルビーが作業の手を止めることなく、身体を音楽に合わせて動かしながら、歌っている。

幼い頃から、家族との会話は、手話でしかできなかったルビーである。手慣れたもので、手話のスピードは驚くほど速い。しかし船の上では、特に網を引き上げたり、仕分けをしている時は、手を使うわけだから、普通の人みたいに喋りながらという訳にはいかない。だからルビーは、作業しながらよく歌を歌った。どんなに大声で歌っても、海の上である、聞いている人はいない。しかも父と兄の耳には届かない。声量が豊かになったのは、そのためであろう。また彼女は、歌うのが大好きでもあった。

漁から戻ったルビーは、水揚げした魚を前に、漁業組合の仲買人と交渉する。それも話すことが出来る彼女の仕事であった。提示された価格は、どう考えても安すぎる。「鱈が二ドル五十？　競（せ）りの値段は？」文句を云うと、「金のことは任せとけ」仲買人に軽くあしらわれてしまう。その憤懣を父と兄に告げると、レオはフランクに向い、「俺たちで売ろう」提案する。

「試した奴らは失敗した」父親は否定的だ。レオは納得いかなげな様子で「泣き寝入りかよ」

――まったき静寂の中に、身を置き続けなければならない辛苦は、どれほどのものだろうか。私ごときには想像すら及ぶべくもないが、そういう人が、子供を育てるのである。本編の後半で、母親がハイスクールでのコンサートのために買ったという赤いドレスを手にして、ルビーの部屋へ来たとき、

「私が聾者（ろうしゃ）ならよかったと思う？」と尋ねるシーンがある。

母ジャッキーは、「病院であなたが生まれたとき、聴覚の検査を受けた。小さくて愛らしいあなたの身体に、電極がたくさん付けられた。そのとき祈ったわ、聾の子でありますようにって。耳が聞こえると判り、私は心が沈んだ」

「なぜ？」

「判り合えない気がして。私と母は希薄な関係だった。きっと子育てに失敗する。耳の聞こえない母親なんて……」耳の聞こえない子を願う母親はいない。だが聾であ

る母親にとって、これは偽りのない、本心だろうと思う。そういった哀しみをも、背負わされているのである。

タイトルの『ＣＯＤＡ』とはChildren of Deaf Adultsの略で、耳が聞こえない、或いは聞こえにくい親の許で育つ子供のことを謂い、両親のみならず片親が聞こえない場合も、該当するという。

監督と脚本を担当したシアン・ヘダーは、二〇一四年に制作されたフランス映画『エール！』のリメイクを、自らの意志か或いは依頼されたか、ともかく機軸を新しくして作り直そうと、意図したようである。そのため酪農を営んだ家業を、健聴者の手助けが絶対的に必要である漁業に変更し、前作では「健聴者が耳の聞こえない役を演じるのか！」と非難が殺到したという轍を踏むまいとしたのだろう、「耳の聞こえない優秀な役があるのに、耳の聞こえない優秀な役者を起用しないのは考えられない」と強硬に主張し、押し切ったという。そうトロイ・コッツァーもダニエル・デュラントも、そしてマーリー・マトリンも、実際に耳が聞こえない方たちなのである。(余談も余談で恐縮だが、彼女が主演して見事アカデミー主演女優賞を獲得した『愛は静けさの中に』を、封切られた当時の一九八六年、私はリアルタイムで観ている。殆どアクション映画しか観ていなかった時期なのだが、なぜこの映画を観ようという気になったのか、どうしても理由が思い出せない。例のごとくポスターに惹かれたのかな。因みに兄レオ役のダニエル・デュラントは、この映画を観て役者になることを、志したという)

ルビーはいつものように、兄に冗談めかした悪態を手話で吐くと、レオのお返しの悪態に送られて、学校へ向かった。

二

授業中、ルビーはいつものように居眠りをしている。早朝から男顔負けの肉体労働にいそしみ、しかも若い。眠くならないほうが、おかしいくらいである。先生も心得たもので、起こしはするが叱りはしない。

放課後、ルビーのたったひとりの親友であるガーティ（エイミー・フォーサイス）と、選択科目は何にするか話していると、クラスメイトの一団が「魚臭いわね」と嫌味芬々たる態度で、通り過ぎて行った。確かにいつもは漁の後、着替えてから登校するのだが、今日は時間がなかったためそのまま来てしまってはいた。だが、彼女たちの指摘には瞭かに侮蔑のニュアンスがあった。「聾者の真似もするわ」とガーティが指摘するように、ルビーは、漁師の子であるというより、〈聾の子〉だというので、差別を受けていたのである。ガーティは、そんなルビーの胸の内を知ってか或いは気付かない振りをしているのか、「楽な科目がいいわ。映画クラブなんていいかも。あんたは？」

気を取り直して、科目を選ぼうとした時、以前から憧れに近い気持を抱いていたマイルズ（フェルディア・ウオルシュ＝ピーロ）が、合唱部に申し込んでいるのを目撃し、ルビーもすかさず合唱部に申し込む。「本気なの？」驚くガーティに、「わたし歌うのが好きだから」と答えると、「物好きね、只でさえ浮いてるのに」と返された。

――合唱部の顧問ベルナルド・ヴィラロボス先生は、集まった生徒を前に自己紹介した後、〈ヴィラ〉の発音が巻き舌で云えない人は、〈V先生〉で構わないと付け加えた。メキシコ人である。以降、ルビーは普段はそう呼んだ。

V先生は、各自の音域を確かめたいからと、ひとりずつ歌わせていく。しかし自分の順番が来たとき、ルビーは急に怖くなったのか、教室を飛び出していってしまう。「脱走だ！」半分冗談めかした先生の声だけが、後を追った。

翌日、漁を終えて港に戻ると、漁師たちの人だかりができ、漁業組合の担当者がなにやら説明している。近づいて話を聞くと、漁獲制限に関して違法行為がないか、海上監視員を順次各船に乗せるという。その費用は自己負担で、一日八百ドル掛かるという。「一日の稼ぎより多いじゃないか」漁師たちのブーイングが飛び交う。担当者は「国が決めたことだ」断固たる口調である。また締め付けがきつくなった。

放課後、ルビーはV先生を訪い、昨日の行動を詫びた。

「合唱を選んだのに、歌うのが怖いか？」

「人前では緊張して、みんなにからかわれるわ。……入学した頃、喋り方が変だと……」

V先生は暫く考えて、「コーダ(聾の家族の子)かね？」と尋ねた。

「CODA　あいのうた」左からダニエル・デュラント、マーリー・マトリン、エミリア・ジョーンズ、トロイ・コッツアー

頷くルビー。

また暫くの間があり、「(デヴィッド)ボウイが、ボブ・ディランを評した。『砂と糊みたいな声だ』。大事なのは、声で何を伝えられるかだ。君は伝えられるか?」

「そう思います」少し考えてからのルビーの返事に、V先生は破顔して「よろしい、それでは授業で会おう、ボブ」

帰路、ルビーはガーティと待ち合わせ、自宅に伴った。自宅には兄だけが留守居しており、所在無げにスマホを眺めていた。ガーティは挨拶すると、いたく気に入った様子でルビーに、「兄さんはマッチョね」と云う。ガーティは傍の眼を気にせず、ルビーの親友である位だから人柄は悪くないのだが、年頃のせいもあるのか、昨夜は誰々と寝たわとオープン過ぎるほど、性に関心を持っていた。「兄を狙うのはやめて」ルビーは釘を刺す。「どうして?」「だってセックスが目的でしょう」「あら、妹の許可がいるわけ?」ガーティは平然としたものである。それどころか、兄レオと話をしようという心算なのだろう、ルビーに、手話を教えろとしつこく迫る有様であった。

三

みんなが揃って歌うその伴奏をしながら、ひときわ異彩を放つルビーの澄んだ綺麗な歌声に、V先生は内心驚いていた。この声は天性のものだ、決して砂と糊なんかじゃない。だが歌い方は覚束なく、原石だがまだダイヤモンドの輝きを放ってはいない。

「正しく呼吸しないと、声は出ない」と、小型犬・中型犬・大型犬の鳴き声を模して、呼吸法と声の出し方を、徹底的に教え込む。

何日か経った頃、授業後にルビーとマイルズのふたりを残し、V先生は「秋のコンサートでデュエットをやることにしたから、ふたりで一緒に練習するよう」申し渡す。

しかし数日を経ても、ふたりの呼吸は揃わない、尋ねると、一緒に練習はしていないという。V先生は呆れて、「デュエットなんだから、必ず一緒に練習しろ」きつく命じた。という次第で、ルビーはギター持参のマイルズを自宅へ伴う。だがそこでふたりは思いがけない椿事(ちんじ)に、遭遇することになる。

マサチューセッツ州グロスターは、小さな町である。だからふた

りは幼い頃から顔見知りではあった。ある時、ファミレスでルビーが両親のためにビールを頼むのを目撃したマイルズは、「カッコいいなあ」憧れたという。その彼は、ひとりでバスに乗るのも禁止されるほどの厳格な家庭で育てられ、当の両親はお互いに反目し合っている、寂しい環境だという。ルビーはというと、彼が合唱部へ入ったのを見て即入部を決めたくらいだから、これまた当然憧れている。意識しあったふたりが、一室で向かい合うのである。ぎごちないのは仕方がない。漸く少し打ち解けて、練習に取りかかった時、隣室からベッドの軋む音と、奇妙な呻き声が聞こえてきた。嬌声？　ふたりは顔を見合わせるが、すぐにマイルズが「あれ、お母さん？」と気が付いた。父と母がまさに愛の営みの真っ最中だったのである。ルビーはすぐに部屋を飛び出し、隣室のドアを少しだけ開けると手を差し入れ、電燈のスイッチを何度も点けたり切ったりして、自分の存在を知らせる。

　居間に落ち着いた四人。母は誰もいないと思ってたと云い、またルビーの隣に腰を下ろしたマイルズを部屋へ招き入れたのは、自分たちと同じ行為をするためだと勘違いし、「コンドームを使ってね」と諭す。あっけらかんとしたものである。父はそれを受け、手話のみか身振り手振りで「兵士にヘルメットを被せろ」と云う。そこまで見て、流石にマイルズも気が付いた。思わず笑い出す。ルビーは恥ずかしさに堪らなくなり、マイルズを追い立てるように帰す。

　翌日、昼食で学生食堂へ行ったルビーは、クラスメイトの女の子に、両親の最中の声を真似されてからかわれる。「マイルズがみんなに喋ったのだ」頭に血が上ったルビーは、食堂を飛び出す。その様子を見たマイルズが、慌てて追いかけてくる。あまりに〈ぶっ飛んだ〉経験だったから、つい話してしまった。でも親友一人にしか喋ってないと言い訳し、平謝りに謝った。しかしルビーの怒りは収まらず、絶交を云い渡す。

　――練習を続ける内に、V先生はルビーの才能を、愈々確信した。「卒業後は？」どうするのだと尋ねる。「家の仕事を手伝います」と答えるルビーに、

「マイルズは、バークリー音楽大学を受ける。私が指導中だ。君も受けてみないか？」

「でもお金がない」家の経済状況を知り尽くしている彼女は、躊躇った。

「奨学金でまかなえる」それでも、捗々しい返事がないので、V先生は考える時間が必要だろうと、判断した。それまでやるべきことをやっておこう。

「夜間と週末に特訓を行なうことにする。時間を無駄にするな。君に声を掛けたのは、可能性があるからだ」そう云って励ます。

四

　もう何度目になるだろう。レオが父フランクに訴えかけている。「協同組合を作ろう。空いている倉庫がある。事業を始めるんだ。他の連中も誘おう」

　だが父親は相変わらず、否定的である。「参加する訳ないだろう。俺たちは聾者だぞ。役立たずと思われている」

　聾者は役立たずなのか、何にも出来ないのか？　その呪縛から逃れようと、レオは足掻いていた。だからこそ通訳から卸値の交渉まで、健聴者である妹に頼らざるを得ない自分が、腹立たしくもあったのである。

　その日の夕間暮れ、仲間に誘われ飲みに出たレオは、ぶつかってきてしかも彼の服に酒を零しながら謝りもしない男と、殴り合いの喧嘩になった。仲間の仲裁で事なきを得たが、憤懣やるかたなく、また家に帰る気もしないレオはひとり飲み続けた。その彼の前に立ったのが、妹の親友であるガーティである。「何だ、小娘が居酒屋でアルバイトか」

　レオの喧嘩の一部始終を見ていたガーティだが、彼女は手話ができない。そこでスマホを伝言板にしての会話で、以前から彼を憎からず思っていたことを、打ち明ける。レオにもその気があったのだろう、また酒の酔いもあった。何と、店の倉庫で関係を持ってしまうのである。

　これまで否定的な見解しか口にせず、レオの提案を却下してきたフランクであったが、漁業組合との団体交渉の場で、その態度が一変する。議題は、漁獲制限と海上監視員に就いてである。

「漁獲制限で、百隻の漁船が十五隻に減った」

「政府から金を貰ったか？　現場も知らずに制限するな！」漁師たちの罵詈雑言が飛び交う。それを

宥めながら、組合の役員が、
「海のデータを集めるため、監視員を付ける。負担なのは判るが、漁業を護るためだ……」
そこへ練習のため遅れてきたルビーが現われ、父の横に座る。役員の唇を早すぎて読み切れなくなった父は、彼女に「訳せ」と命じる。
「魚だけでなく、君らの心配をしてるんだ。昔とは違う。全員が犠牲を払うべきだ」
ルビーの手元を見ていたフランクは、突然挙手すると同時に立ち上がり、卑猥な悪態を吐いた。彼女は驚いた。訳していいものか、仮にも私は女の子だぞ、だが父の気持もよく判る。仕方なくルビーはみんなに伝える。但し、父の言葉ですと注釈を入れて。漁師たちの間に、笑いが湧いた。フランクは尚も言い募る。
「俺たちが制限されても、お前は平気だ。儲かるからな。俺たちは漁に見合う金を貰ってない。……競りには加わらない。自分らで魚を売る。加わる者は？」
それまで黙って隣で成り行きを見守っていたレオを父親は立たせ、お前も何か云えと、促す。我が意を得たりとばかりに、
「利益の六割も掠め取られて平気か？　俺に魚をよこせ、手取りは倍だ。客と契約して魚を直に売る」とレオは力説する。驚いたルビーは「倍で良いの？」兄に確認する。
（またもや余談で恐縮だが、ここまで観た時、昨年TV放映されていた『ファースト・ペンギン』を思い出した。漁船の事務員として雇われたシングル・マザーの奈緒が、船長の堤真一や乗組員の梶原善や吹越満らと共に、暴利を貪っていた漁業組合の組合長・梅沢富美男に対抗して、新たな販路を開拓するという、実話を基にしたドラマである。因みに、ペンギンは元来臆病な動物であるが、敵の多い海へ勇を鼓して最初に飛び込む果敢なペンギンを、ファースト・ペンギンという）
――「どれだけ大変か判ってる？　お金もないのに」母ジャッキーの剣幕に、フランクはつい勢いでと謝るが、かくして漁師協同組合が設立される。法的手続き、顧客獲得のためのチラシ配り、漁師仲間の勧誘等々、健聴者であるだけに人一倍ルビーは忙しさにてんてこ舞いである。当然V先生の特訓にも、遅れがちになる。何度目かの遅刻の時ひどく叱られ、「君は私の時間を無駄にしている。次にやったら特訓は打ち切る」と申し渡される。もう二度と遅刻はしません、ルビーは誓わざるを得なかった。
しかし或る日、練習に向おうとする娘を、母親が引き留める。順調に機能し始めた協同組合の試みが目新しいので、ぜひ取材させてほしいとTVクルーがやって来るというのである。そのための通訳が必要だと。悩んだ挙句、ルビーは遅れる旨を先生にメールする。だが返ってきた返事は、「遅刻しない約束ではなかったのか」にべもないものであった。
取材を終え、大急ぎで先生の家へ駆けつける。だが中からピアノの音は聞こえるのに、玄関は施錠され、開けては貰えなかった。

五

翌日、合唱部の部室で、V先生に神妙に謝るルビー。「ごめんなさい……やる気はあります」先生の機嫌はなおらない。「そうは思えん。時間にルーズで、準備もしてこない。進学しても二日ともたん。出て行け」実際のところ、ルビーの才能を伸ばしてやりたいと苦慮する先生にしてみれば、音大への道を指し示したのに、当の本人が何の意志表示もしてこないことが、腹立たしかったのだと思う。
「先生は、大学が役に立った？」
「私が教師になったのは、天職だからだ。だが力が発揮できない。挑戦を怖れる生徒に教えたところでムダだ」
ルビーは不安げな面持ちで、「家族抜きで行動したことがないんです」と云った。その一言が、彼を思い直させる。
幼い頃から、唯一耳が聞こえ話すことが出来る人間であったがゆえに、家族に頼られ、常に家族の傍にいて、家族のことを優先させてきたルビー。自我が目覚めても、その行動原理は、常に家族と共にであった。自分ひとりで何かをするなど、考えられなかったのである。それが音大へ進学するとなれば、家族と離れ、自分で考え、自分だけで行動しなければならない。出来るのだろうか。家族はどうなる。だが夢は諦めたくない、歌の勉強を続けたい。不安と希望、その間を彼女は幾度も行ったり来たりしていたのだ。それが理解できただけに、V先生は折れざるを得

なかった。

しかしルビーが放ったその言葉は同時に、彼女自身の決意を固めさせる引き金ともなった。その夜、ルビーは音楽大学に進学したいことを、家族みんなの前で告げる。学費は奨学金で何とかなるから。

「家業はどうなる?」家族、特に母親が強く反対した。実際困るからである。説得は無理と思われた。

「私は生まれてからずっと通訳の役目を……もう疲れたわ。私は歌うのが好き、生き甲斐なの」それだけ云うと、ルビーは部屋へ逃げ帰る。

習慣で翌朝三時に目覚ましをセットした時、マイルズからメールが入った。「どうしたら赦してくれる? 何でもするよ」絶交を申し渡されて以降、学校でルビーを見かけると、彼は謝ろうとその度に声を掛けてきた。だがルビーは無視し続けたのである。思えばこのメールは、絶好のタイミングであったのかもしれない。家族と決別しなければならないかもしれないという怖れにも似た思い、家族の軛から解放されたいという願い、相反する揺れ動く気持の狭間にあって、ルビーには一縷の癒しに思えたのである。

翌日、条件付きで、ルビーはマイルズとデートすることにする。その条件とは――ひとりになりたい時、彼女がよく出かけた小さな湖の、切り立った崖から飛び込むことが出来たら、赦してあげるという、他愛もないものであった。十メートル程の高さ（と、マイルズは驚いていたが、実際はどう見ても五ないし六メートルぐらい）から、ふたり揃って湖に飛び込んだり、丸太に掴まって泳いだりと、ルビーのみならずマイルズも、久し振りに打ち解けた時間を過ごした。――だが、船に乗ることをすっぽかして、楽しい逢瀬を持ったルビーのこの行為が、重大な事態を招くことになろうとは……

その日の早朝、船上で漁に出る支度をする、父と兄。

「ルビーは?」尋ねるレオに、フランクは「拗ねて来ない」

「困ったな。今日は大事な日なのに」レオが零したその時、両手に重そうな鞄を下げた人間が、こちらへやって来るのに、ふたりは気付く。フランクは「あれが監視員か」

かねてより通達があった監視員のアンジェラ・ローズ号への乗船日が、まさしく今日だったのである。女性だった。海上監視員のバイルズと名乗り、荷物のひとつをレオに渡すと、乗船してきた。船が岸壁を離れた後、暫くしてバイルズは違和感を覚え始める。会話どころかふたり共に自らの名を名乗ることもなく、若い男はただ黙々と作業に余念がなく、操舵する年配の男は、眼が合うと笑いかけてくるが、声を掛けても返事すらしない。最初は寡黙な人たちだと思ったのだが、どうもおかしい。彼女は、ふたりの乗組員が耳が聞こえない事を、事前に知らされてはいなかったのである。状況が認識できたのは、船のメンテナンスに就いてフランクに質問した時である。エンジン音がうるさくて聞こえないのだと思い、フランクに面と向かって話しかける。だが彼は苛立たしげに、彼女が手にしていたメモ帖とペンを奪い取り、「耳が聞こえない」と殴り書きし、突き付けた。それを読んだバイルズは、レオを指差す。彼も? そうだとフランクが頷く。その瞬間バイルズは蒼褪め、そしてパニックに陥った。「危険極まりないではないか!」すぐに携帯電話を取り出すと、沿岸警備隊へ通報する。程なくして無線がしつこく呼び出しをかけてきた。無論ふたりは出ないし、バイルズはおろおろしているばかり。すぐに警備艇が姿を現したかと思うと、拡声器で停船を呼びかけながら急速に接近し、見事な操船で強引に横付けしたかと思うと、ふたりの警備員がすかさず乗り込んできた。アンジェラ・ローズ号は拿捕されたのである。

裁判所の被告人席に、フランク、レオ、ルビーが並んで座っている。判事が厳かに申し渡す。事情を鑑み、というのはおそらく乗組員が聾者だからということだろうが、最少とはいえそれでも千ドルの反則金に千五百ドルの罰金が加算され、計二千五百ドルの支払いを命じられる。フランクが「海に出ないと、そんな大金払えない」と手話。それを受けて「どうすれば漁の再開を……」ルビーが判事に尋ねる。

「無線や他の船の汽笛に応答できるように、聴者を必ず乗船させること。規則に従っているか、定期的に監視する。そんな人はいるかね?」判事の最後の問い掛けが、ルビーの心に深く突き刺さった。私が一緒に船に乗ってさえいれば、こんな事態を招くことはなかったのだ。

その日の夕餉の席で、父が「船

を売ろう。船を売れば何とかなる」と母に持ちかけた。そのやり取りを見て、ルビーは思い決したように、私が残るわと告げる。「聴者を雇うお金はないし、まして手話のできる人となれば尚更だわ」

憤然とした様子で兄レオが立ち上がり、「聖ルビー様、船に教会でも作るか」嫌味たっぷりに吐き捨てる。「助けてくれるのよ」母が取り繕おうとするが、レオは「孝行娘だよ」捨て台詞を残して、表へ出て行く。ルビーが家族のために夢を諦めることを、当て擦ったのだが、妹にばかり頼る両親と、それを仕方がないと諦めている自分自身が、業腹だったのでもあろう。

翌日、ちゃんと話し合おうと、海辺の岩に腰掛け考え事に耽るレオに、呼びかけるルビー。兄は彼女の顔を見て、

「家族の犠牲になるな」と云う。

「それが悪いこと?」

「お前の歌は凄いと聞いた、特別だって。ここにいちゃダメだ。永遠に頼られちまう」

「じゃあどうしろと?」

「俺に任せろ、これでも兄貴だぞ。新事業は、お前に頼りっきりだがな」

「それは耳の聞こえる人が相手だからよ」

「家族がバカに見えてもいいじゃないか。お前が卑屈になることはない。俺たちは無力じゃないんだ」力強くそう励ます。が、それは自分に対する鼓舞でもあった。

そのあとレオは、「お前が生まれるまで、俺たちは平和だった」という奇妙に思える言葉を残すと、ルビーに背を向け歩み去った。

六

〈秋のコンサート〉当日である。父と母、それに兄がやって来た。舞台の上から、確認するルビー。少し遅れてガーティが姿を見せ、少し恥ずかしそうにレオの隣に座る。彼女は、いまや兄の半ば公然の恋人であった。

合唱部全員によるコーラスが始まった。ルビーは母が買ってくれた赤いドレスに身を包んでいる。だが、音や声が聞こえない人にとって、音楽や歌声は、まったく意味を成さない。だからジャッキーとフランクは、自分たちに必要な会話を始める。「晩は何を食べたい?」「スパゲッティーがいいな」「だったら帰りスーパーに寄らなくちゃ」……

コーラスが終わった。次いでV先生の「特別な歌声をお届けします。この声を聴けば、音楽に酔い痴れるでしょう」という紹介で、ルビーとマイルズのデュエットが始まる。歌い出すふたり。暫くして音楽や歌声が消え、無音になる。カメラはフランクとジャッキーの背後から近づく。ふたりの肩越しに見える舞台の上では、『ユアー・オール・アイ・ニード』のデュエットが続いている。つまり映画の観客は、ロッシ家の人たちと、同じ状態に置かれるのである。

カメラがフランクの左横からに切り替わると、彼は左見右見(とみこうみ)して、聴衆の様子を窺う。娘の歌の反応を知りたいと思ったのだろう。生き甲斐だという娘の歌が、人々の心に、どのように響くのか。……身を乗り出して聴き入っている人がいる。リズムに合わせてだろう、ゆっくりと首を振っている人がいる。涙ぐんでる女性もいた。みんなの視線が、舞台に釘付けである。誰一人そっぽを向いてる人はいない。娘の歌声は、聴いている人たちの心を掴んでいる。感動させている。歌が終わった。全員が立ち上がり、興奮が抑えきれないのか、盛大な拍手を送っている。娘の歌は、歌声はそんなにも素晴らしいのか。フランクの全身は、云い様のない驚きで充たされる。――その驚きが、彼に一大決心を促す事となるのである。

帰宅後、庭先で考え事をしていたフランクは、近寄ってきたルビーに、

「今夜歌った歌は、どんな歌だ?」

「人はお互いに誰かを必要としているって歌」

「俺のために歌ってくれるか」父親の突然の頼みに、戸惑いながらも、歌い出すルビー。

「もっと大きな声で」フランクは、娘の首筋を挟み込むように両手を当てて聴いている。恰も声帯の震えを確認し、そこから歌声を感じ取ろうとするかのように……歌い終わった娘の肩を抱き寄せるフランク。決意は固まったのである。

翌朝、父親に叩き起こされるルビー。「どうしたの? 漁に出るの」半分寝ぼけ眼(まなこ)である。「音楽大学の受験に行くんだ」理由を聞かされ、愕然となる。確かに今日は受験日で、昨夕V先生はマイルズだけでなく、私の受験枠も取ってあると云っていた。だけど私は諦めたの、家族のために大学へは行かない。

そう決めたの。だがしかし、音楽大学で歌を勉強したいという思いが、完全に吹っ切れた訳ではなく、ルビーの中で未だせめぎ合っていたのもまた事実である。その狭間に、大好きな歌を続けるんだ、多くの人たちに聴いて貰うんだという決意を込めた、出かける支度を急かす父の手話が、強引に入り込んできたのである。大急ぎで家を出て車に乗り込む四人。ルビーは状況の変化がよく呑み込めず、「どうかしてるわ」と不審がる。母親は「どうせ追い出すなら、家族で見届けなきゃ」とすまし顔である。おそらく母も父に説得されたのだろう。

　ルビーは車内から、V先生に今向っていますと、メールを入れる。大急ぎで受付に駆け込む。三十分遅れではあったが、何とか許可してもらえた。すぐ歌える準備をしてくれと云われる。マイルズがやって来た。「どうだった?」尋ねるルビーに、声が詰まってしまったと、肩を落とす。先生は? 「ついさっき帰った」ルビーの名が呼ばれる。家族は中に入れないからと、ロビーで待つよう指示される。

　三人の審査員は帰り支度で、序でに聴いておくかぐらいの軽い気持であった。壇上に立つルビー。歌う曲目を聞かれ、『青春の光と影』と答える。楽譜はありますか? 慌てて家を出たので、そこまでは気が回らなかった。「忘れました」女性の審査員が、ピアノの前に坐っている伴奏者に、「伴奏できますか?」首を横に振られた。おそらく審査委員長なのだろう、三人の真ん中に座る男性が、「ではアカペラで歌って下さい」と命じた。

　そのときホールの後ろから声が掛かり、帰ったとばかり思っていたV先生が現われる。先生は審査員に失礼を詫び、姓名を名乗り、この学校の卒業生だと云い、自分の教え子だからと伴奏の許可を求める。許されて、先生の伴奏で歌い出すルビー。だが彼女は緊張の権化と化していた。声は小さく伸びもない。聞くだけ無駄かなという失望感が審査員の間に漂いかけたとき、ヴィラロボス先生が伴奏を間違える。わざとである。「私が間違えました。もう一度最初からよろしいですか」先生の顔を見詰めるルビー。先生は力強く見詰め返す。機転で緊張がほぐれたのだろう、再度気持を籠めて歌い始める。怖がってちゃダメだ、今度はしっかりとした歌声である。審査員が、おやっという表情を見せる。

　そのとき二度目の意外事が発生する。ロビーで待っている筈の両親と兄が、二階座席に現れたのである。階段を見つけ、ルビーの晴れ姿を一目見ようと、そっと上がって来たのだ。驚きと、次に笑みがルビーの満面に拡がる。そのとき、彼女は卒然と理解したのである。

　聾の家族の中にあって、ただひとりの健聴者であるルビーは、謂わば異端児である。故に両親は、腫れ物にでも触るような特別な感情を持って、彼女を育ててきた。母は特に、子育てに失敗できない、という思いが強かった。常に家族と行動を共にさせ、家業を手伝わせたのは、確かに便利であり重宝だったからではあるが、目が離せなかったというのが、本音であろう。成長し、音楽が大好きで歌うことが生き甲斐と思えるようになった現在、異端児はその存在が異端ではない世界で、自らの夢を叶えろ――兄は、そう云ったのだ。両親も、愛する家族である娘を、異端者の世界へ放り出すのは、断腸の思いであったに違いない。だが父は娘の夢を叶えてやりたいと願った、娘の歌の上手さと熱い思いを信じた。だから実利的な母親を、懸命に説得した。娘を手元から旅立たせることを、共に決意したのである。

　ルビーが家族を思う以上に、彼女こそ家族の情愛で、護られていたのである。

　ルビーはその情愛への限りない感謝を、家族へ届けたいと願った。祈った。

　その祈りと願いを歌詞に託し、清唳と響き渡る歌声に載せて、尚且つ彼女は何と〈手話〉でも歌い出したのである。審査委員長が、歌声の素晴らしさに引き込まれながらも、突然始められた手話を訝しみ、背後を振り返る。二階に三人の姿を認めるも、納得した様子で何も云わずルビーに注目し直す。

　ルビーは声と手話で懸命に歌い続ける。今まで見守ってくれてありがとう。応援してくれてありがとう。どうか、どうかこの思いが届きますよう、そう念じながら……

　彼女を見詰める父と母と兄の顔には、慈愛の笑みが浮かんでいる。

（2023年4月）

×　×　×

「侏儒の映画館」（久保嘉之・著）書評

自分だけのヒーローを求めて

門馬徳行

親切な映画館への招待

私は、映画の感想などを述べる場合、傲慢にもその作品を見ていない人を対象にはしなかった。あくまでも見た人を前提に書いてきた。だから、ストーリーはできるだけ省いてきた。見ている人たちに、改めて説明する必要があるだろうかと思ったからだ。が、本書に接して、それはなんと思い上がった書き方だったと反省した。最低でも〈起承転結〉くらいは書かないとの思いが豪雨のごとく襲いかかってきた。さらに、映画を語る時には、見ていない人に対する作品の説明も大切なキーワードになることを悟った。私自身、これまで映画のあらすじ等を読んで見たくなった作品が数多くあったからだ。この「侏儒の映画館」を読んで、まず、そう直感した。著者は、丁寧にそれぞれの作品概況を追ながら随時感想などを記し、これは〈映画案内〉だと語っている。映画の内容が判らなければ、観たいという気持ちにならないのでは、という問いかけだ。が、これには相当の勇気と根気、さらに無類の記憶力がなければなかなかできないことだろう。つまり、著者と同じフィールド上に立ってもらい、一緒に作品を考えてみよう、というスタンスをとっている。だから、本書は〈映画を早送りで観る人たち〉にとっては、決してバイブルにはなりえないだろう。結果だけ求める彼等には、無縁のツールになってしまうからだ。このおよそ600頁に及ぶ評論集の中で、とくに共鳴したり、かなり触発された項目についてまとめてみようと思う。ここで取り上げられているすべての作品を見ているわけではないが、著者の丁寧な解説をもとに自分なりに総括、分析、吟味して〈的外れかも感想〉を述べることにしたい。

「人斬り五郎のジレンマ」について

この章では、渡哲也の主に1968年前後の作品が8作（無頼シリーズ6本、他2本）、とりあげられている。かなり乱暴に言うと、これは、著者から渡哲也（すなわち、無頼シリーズの主人公〈人斬り五郎〉）への熱いラブレターと思える。彼への思い入れと溢れ出る羨望は並大抵のパワーではない。それは、最期の章でこう書かれていることで明白である。「あなたの映画、あなたの生き方は、青春時代の私にとって何者にも勝る、人生の教科書でした…」。いかに、彼が著者にとってまごうことなき〈ヒーロー〉だったのかが良くわかる。私自身も〈日活アクション〉にはなれ親しんだ世代だが、石原裕次郎、小林旭、赤木圭一郎の時代だったせいもあり、渡の作品は、10本は見ていない。とくに当時は、〈無国籍アクション映画〉と呼ばれた〈流れ者シリーズ〉を良く見ていた覚えがある。さらに、同時期の東映の任侠映画（時代劇を含む）も盛んに見ていたので、日活からは少し足が遠のいてしまった感がある。が、小林旭、高倉健、鶴田浩二にしても著者が渡に抱いたような熱いシンパシィを感じることはなかった。不幸にも、彼らは私にとっての〈ヒーロー〉にはなりえなかったのだ。本書によると、裕次郎の後継者として日活に選ばれた渡は、裕次郎の二番煎じにならないように監督や脚本家たちと自分の世界を作り上げていった様子が細かに語られている。結果、裕次郎の呪縛を解き渡哲也として羽ばたいたのが『紅の流れ星』（1967）だったというターニング・ポイントもきちんと抑え、そして、その経緯から生まれたのが無頼シリーズ6作等になっているのだと。この連作は、任侠映画でありながらどこか青春映画の雰囲気もあるのが異色。そこが、他社の任侠作品とは一線を画していた。ヤクザ映画の主人公は、だいたい寡黙と決まっているのだが、このシリーズの五郎は良く喋るし、泣

「無頼　黒七首」左から、中谷一郎、渡哲也、松原智恵子

くし感情がすぐ表にでると指摘。ただカッコイイだけではなく、生身の人としての苦しみや悲しみを背負った、いわば傷だらけのヒーローとして描かれている。著者は、その屈折した姿に思わず惹かれたのではないかと思われる。1作目『「無頼」より　大幹部』（1968）からシリーズ全般にわたり、主人公の人斬り五郎は、堅気の生活を志しているのだが、市民社会からは差別され、ヤクザのしがらみから簡単には抜け出せないがんじがらめのジレンマに陥る。この葛藤の様子を著者は、〈やりきれなさ〉として表現している。そして、この〈やりきれなさ〉こそが、この無頼シリーズの一貫して流れ続ける通底音だ、と説く。やむなく人を斬る。意に反して人を刺さねばならない。5作目の『無頼　黒七首』（1968）の章では、五郎の背景が書かれている。戦争孤児の五郎は、必然的にやくざ社会に。父も母も兄弟もいない。もう、完璧な一匹オオカミ、つまり孤独なアウトローになるしかなかった。ここに痛切なエレジーが流れる。

「人を殺めなければならない、理由・過程はともかく、結果として生じるそのやりきれない思いが派手なアクションの陰から、常に顔を覗かせている。」渡の作品の底に流れているのは、その痛切な情念だと、泣かせる分析をしている。その世界は、おそらく誰も立ち入ることができない、著者だけの〈人斬り五郎〉の濃厚な時間なのだろう。シリーズではないが、〈人斬り五郎〉の終焉を感じたという『仁義の墓場』（1975）の章で著者は再びこう語る。五郎は堅気の世界で暮らすことを、何度も夢見たが、次第に疲弊し遂に堅気になることを諦めてしまった、と。渡本人も俳優として一番楽しく、燃焼できたのが『仁義の墓場』と、言っていたそうだが、この作品が最後でスクリーンから去っていくことに。が、それから幾度か病に倒れながらも渡は、息の長い役者ぶりを見せTVの世界でも存在感を発揮していく。とくに著者がふれていた倉本聰の『浮浪雲』が突き抜けて面白かった。飄々たる主人公を、渡は楽しそうに演じていた。彼には、もうひとつの別の顔があった、ということになる。この緻密で壮大な渡哲也論を前にすると、これを書かなければならないという作者の叫び声と熱い視線が、全ページから聞こえてきそうな気がする。本書は、作品ごとの克明な概要が語られているが、それに読者が付いていけるか、読み込む忍耐を持つかどうかがひとつの鍵だろう。もっと簡潔な紹介でも良かったような気がしてならない。見どころやヒントを伝えるだけでも、興味を持った人はきっと映画を見ると思うから。みんなに見てほしいという客観性と、どっぷりと渡の世界に入り込んでいる著者の情念との融合性が大事だと思う。しかしながら、私は著者の熱い思いがこもった文脈に共鳴し、〈渡哲也の無頼シリーズ〉を再びふれて見てみようと思った中の一人であることは、言うまでもない。

「私論　映画化された江戸川乱歩の作品」について

江戸川乱歩は、私も興味がありあの独特の世界観が癖になって相当数の作品を読んだ。これまで、映画化された作品も何本か拝見している。乱歩は、怪奇、幻想、変態、倒錯、偏愛、夢想等の言葉がズラリと並ぶ異質、異形の作家と言われている。映画界で言えば、ディビット・リンチ、ギレルモ・デル・トロ等の名前がでてくるゾーンだろう。ここでは、8本の乱歩作品について紹介されている。最近は、世界中の映画を始め様々な媒体でやたらサイコパス物（かなりの比重で韓国作品が多い）が乱発されている。それは、現実そのものがフィクションを越えてサイコ化しているからだ。そのアブノーマルな作品世界を日本で熟成させるのに乱歩（横溝正史もいるが）は、大きく貢献していたと思う。本章では、深作欣二の『黒蜥蜴』（1968）映画版と舞台版との兼ね合い、三島由紀夫と丸山明宏との関係なども興味深く語られている。黒蜥蜴を演じた丸山はこの役が気に入り、何度も演じていたそうだ。最後の明智との善悪を

超えたかのような対決シーンの異様な盛り上がりが印象的。『黒蜥蜴』で明智を演じたのが木村功なのもまた面白い。その後、TV版では天知茂が十数年にわたって、明智を演じていたが、乱歩の世界には一種独特の雰囲気のある彼の方が似合っていたかもしれない。

増村保造の『盲獣』（1969）についても、乱歩の描きたかった世界はもっと淫靡でもっと邪悪で隠花植物の土壌のようにじめじめしたものではなかったか、と核心をついている。田中登の『江戸川乱歩猟奇館　屋根裏の散歩者』（1976）も、孤独な秘めたる行為を描くことにより人間の欲望と裏面性を見事についたこの耽美的な作品の背景には、日活ロマンポルノの影響がある、という田山力哉の言葉もはさんでいる。加藤泰『陰獣』（1977）は指摘の通り、男女のどろどろした情感を演じきれる役者を使うことができなかった、との視点が印象的。原作がサディズムとマゾヒズムが縺れ合った挙句の、殺人事件だからと。たしかに、役者や監督を変えたら別の作品（例えば、演出が実相寺昭雄だったら、もっと乱歩に迫ったのかもしれない。乱歩のアブノーマルな世界に一番近い体質をもっているのが実相寺だと思う）になったような気がする。著者は『乱歩地獄』（2005）での実相寺作品について独特の映像表現に興味をそそられた、と語っている。実相寺は、乱歩原作の『D坂の殺人事件』（1998）も撮っているので、乱歩の世界に興味はあったのだろう。

『陰獣』であまり表情を出さなかった大友柳太郎の芝居は、かえって仮面に隠れた人間の異常性を出していたのではないかと思われるが、どうだろうか。表向きは普通の顔をしていた人間が実は異常な行動をしていた、というのが乱歩の狙いではなかったか。ベルリン国際映画祭に出品された『キャタピラー』（2010）は、乱歩の『芋虫』を原作にしている反戦映画で異色の作品。銀熊賞を取った寺島しのぶの演技についても触れている。ちなみに、私が乱歩の小説で気に入っているのは、明智小五郎や少年探偵団がでてくる『怪人二十面相シリーズ』で、もっとも衝撃的だったのはこの『芋虫』である。乱歩の作品は最近、またTVドラマ化されていて面白かった。

とくに明智を女優に演じさせるなど、あの魑魅魍魎とした世界にCGを駆使しながら乱歩ワールドに肉薄していた。考察の通り乱歩の世界は、示唆的にしか描かれない怪しい話が多いので、曖昧な箇所がない映像世界には向いてないかもしれない。だから映画化すると小説とのギャップが大きくなってしまうと。著者は『蜘蛛男』の例をあげてイアン・フレミングに伍しえる冒険小説作家は、日本では江戸川乱歩しかいない、というメッセージを送る。私も、名探偵明智小五郎が活躍する映画を見たいし、〈007シリーズ〉を超える作品を期待したい。昨今、〈007シリーズ〉はあろうことかジェームズ・ボンドが最期を迎えたし、今度は女性のスナイパーとの噂もあ

ごまめ書房の映画の本

侏儒の映画館
久保嘉之・著。人斬り五郎のジレンマ―我が愛しの渡哲也―、映画化された江戸川乱歩の作品、バットマン論―あるスーパーヒーローのプロフィール―、リドリー・スコットの映画、など。600ページ。
「本書は、厳密には映画の評論集ではありません。私が観て感銘を受けた映画、とても面白かった映画、興味深いと思えた映画などを綴った、映画案内です」（あとがきより）。
2200円＋税

昭和映画屋渡世
坊っちゃんプロデューサー奮闘記
斎藤次男・著。『切腹』『男はつらいよ』製作の熱血漢が生み出した、歴史に埋もれた大衆娯楽映画の数々――。現場に飛び散る汗、涙！　1960年代の映画屋たちの熱気が甦る。映画評論家、書評等絶賛！
定価2200円＋税

おしゃべり映画館
N雄とN子の21世紀マイベストシネマ
門馬徳行、岩舘範子・共著。映画対談集。147本をシネマフリークが語りつくす。
定価2000円＋税

映画館をはしごして
小泉　敦・著。暗闇の空間での筆者と映画作家の“対決”！　観たものを言葉でとことん読み解く。
定価1900円＋税

人生は映画とともに
今市文明・著。青春時代の映画を語り、ヨーロッパのロケ地を旅し、スターを語る。
定価1900円＋税

観る・書く・撮る
シネマフリークここにあり
門馬徳行・著。フツーのおやじのヘンに熱っぽい映画評論プラス自作シナリオ集。
定価2800円＋税

ばってん映画論
久保嘉之・著。ジェームズ・ボンドと俺（おい）が初めて出会うたとは、忘れもせんクリクリ坊主の中学2年の秋やったばい―。注目の娯楽映画評論集！
定価2000円＋税

●自費出版のご用命も承っております。安く、丁寧に仕上げます。お気軽にご相談ください。

ごまめ書房
〒270－0107
千葉県流山市西深井339－2
電　話04－7156－7121
ＦＡＸ04－7156－7122
gomame.co.jp

るらしい。この機会に、ぜひ明智の復活を望みたい。明智は、ホームズ、ポアロ、金田一耕助などに勝るとも劣らないキャラだと思う。映画化にあたっての課題は、〈なぞ解き〉だけでなく、もう限度がなくなった感があるアクション（〈007シリーズ〉）に対抗するのであれば）の見せ方ではなかろうか。最近、日本の小説を原作にした作品がハリウッドで映画化され始めているので、ぜひともこの機会に日本独特の江戸川乱歩ワールドを再現してほしいものだ。

「バットマン論　あるスーパーヒーローのプロフィール」について

ここでは、ティム・バートンからクリストファー・ノーランに至る『バットマン』7本の作品の経緯と見どころを総括している。バートンの1作目『バットマン』（1989）、2作目『バットマン　リターンズ』（1992）では、ジョーカーを演じた快優ジャック・ニコルソンを評価していたが、これも地味全開のマイケル・キートンの演技と相まっての効果だと思う。もともとバートンは暗めの世界で勝負しているので、異質のニコルソンとのぶつかり合いで独特の効果がでたのだろう。だが、全体が暗すぎる、悪役に同調しすぎているとかの理由でバートンは監督を降ろされてしまったという。彼の世界観を理解しえぬ観客や批評家の不評をかった、ともあるが商売とはそんなものだ。客が入らなければ、次はないということだろう。が、監督が代わり主役も交代した3作目の「バットマン　フォーエヴァー」（1995）あたりから映画がおかしくなり、4作目「バットマン&ロビン／Mr.フリーズの逆襲」（1997）で大コケし、いったん、シリーズ終焉をみせる動向も面白い。続いて、7年後、ノーランによってバットマンは復活する。1作目『バットマン　ビギンズ』（2005）から3作目『ダークナイト　ライジング』（2012）までの全般を通してできるだけ実写にこだわり、バートンとは対極的な映画づくりにノーランは徹していた。当然、ノーランのバットマンも強いだけのヒーローではなく、こころは深く傷ついていた。が、街の守護神に対して、ヒールたちは、情け容赦なく恐るべきパワーで闘いを挑んでくる。2作目の『ダークナイト』（2008）もジョーカーの映画になっていたとの記述があったが、ノーランはさらにジョーカーの狂気と残忍さを異常なほど掘り下げていった。その点、バートンの暗い影のある世界とは大きく変貌していく。著者の言葉通りジョーカーに成りきったヒース・レジャーの悪のパワーは、全編にわたってバットマンを圧倒していた。3作品の中では、とくに『ダークナイト　ライジング』が傑作と著者は認める。ただラスト近く、核爆弾を沖合いで爆発させるのだが、ここで違和感をもってしまう。爆弾とゴッサムシティの距離感が緩いのではないか。もっと離れたところで爆発させなければ、みんなを救えないのではないか、と思ってしまう。つまり、ここではアメリカ映画の〈核〉の描き方がすこぶる甘いことに留意しなければならない。これは様々な作品にも見ることができる。核を爆発させたバットマンは、常識的には昇天しているだろう。しかし、著者の言う通り、ノーランは彼を生還させている。ヒーローは不滅なのだ。そして、もう次のバットマンが現れているから修羅場に巻き込まれることはない。今まで傷だらけになりながら、みんなを救うために戦ってきたのだから「もう休め！」とでも言うかのような泣かせるラストを用意している。さて、ここで独断と偏見に満ちた私見を述べたいと思う。著者が〈無頼シリーズ〉で指摘した〈やるせなさ〉がこのバットマンでも語られていたのではないかとの疑いがある。バットマンはゴッサムの人々を守るために戦うが、一部の理解者を除き、一般市民から見れば〈バケモノ〉で〈お尋ね者〉なのだ。それは、ある意味でジョーカーと同じだ。だから、ジョーカーに「お前は俺と同じさ。不要になったら世間のつまはじき者」と決めつけられてしまう。市民は都合のいい時だけ、バットマンに頼る。かれの心の屈折などおかまいなしだ。だれにも分からぬ苦悩を秘めて彼は、法で裁けない〈悪〉と戦わねばならない。レイチェルは、そんなバットマンを理解できない。生身のバットマンも孤独なのだ。戦う相手も状況ももちろん違うが、微妙に人斬り五郎の心情に同化する瞬間があったのではないか、と思われる。つまり、2人とも傷だらけになったヒーローなのだ。だから、著者は最終話がハッピー・エンドで終わったことについて、「――でなければ、バ

ットマンがあまりに寂しすぎるではないか」と述べたのではないか。こうして、２０２２年に新しい『バットマン』が生まれ、キャット・ウーマンとの新しい展開が見どころになっている。が、新作でもバットマンの本質はなんら変わってはない。映画は、すでに、過去の作品や記憶をどう学んでいるか、どう作品に反映させているか、どうリスペクトしているかが問われる時代になってきていると思われる。が、言いたいことは繰り返し語らねばならない。人間は救いがたい程忘れてしまう習性がある。忘れてはいけない負の遺産さえも、ひと蹴りで消滅させてしまう恐れがある。今後、さらなるバットマンの物語が、どのように展開されていくのかを注目せずにはいられない。ほぼ完成された感のあるノーマンの世界に、どう立ち向かって行くのか。新しい『バットマン』の動向を見つめる著者の眼差しに、さらなる期待を抱かざるを得ない。

「バットマン　ダークナイト」ヒース・レジャー

「リドリー・スコット監督の軌跡・序章～『ブレードランナー』、『プロメテウス』など」について

この章は、スコット作品８本を語っている。まず『エイリアン』（１９７９）がスコットの原点という指摘。公開当時はスコットの名も知られてなかったので、画面からもいかにお金をかけないで制作していたかが良くわかる。映画の中で、エイリアンが乗組員の体から急に出てくるシーンは、どんな姿なのか出演者に知らせてなかったそうだ。だから、あのリアクションは、まさにリアルそのもの。スコットは、そういうトリッキーな演出家なのだ。『エイリアン』には、スコットがずっと追い続けている女性の強さと、〈生〉を阻害する〈死〉が描かれていると著者は述べている。前者のテーマを継承しているのが『Ｇ．Ｉ．ジェーン』（１９９８）、後者のテーマを継承しているのが『グラディエーター』（２０００）だとしている。多少、乱作気味に作品を発表するスコットの本質をついた指摘ではなかろうか。さらに、著者は『ブレードランナー』（１９８２、以下、「ブレナン」）を数多あるＳＦ映画の中にあって、紛れもない傑作としている。公開当時は評価されず、幻の作品になる恐れはあった。が、映画が映画館だけの物ではなくなった社会状況の変化により、じわじわと巷で評価が高まり今日になったわけだ。つまり、『ブレナン』は早すぎた作品だったのだ。著者が克明に描写しているラスト近くのデッカードとバディの対決シーンの素晴らしさは忘れがたい。そして、不思議なことに『ブレナン』は数種類のバージョンが公開されている。本来、公開版はひとつだと思うが、様々な理由があるのだろう。２０１９年のファイナルカット版が最終バージョンと認めてよさそうだ。『エイリアン』は、その後、別の監督で４本作られているが面白かったのは、キャメロンの第２作だと思う。やがて、５本目に考えられたのが『エイリアン』の前日譚『プロメテウス』（２０１２）だ。著者はこの作品を評して「アンドロイドの憂鬱」という秀悦な表題をつけ論じている。スコットは１作目でほんのわずかしか登場しなかったスペースジョッキーを再登場させ、彼らはどのように誕生したのか、彼らはなぜ、人間を創造したのか？さらに、そのエンジニアを作ったのは誰なのか、という堂々巡りに至る大胆で難解な仮説を繰り広げたのだ。著者の指摘がある通りこの試みはやや不完全燃焼に終わっているように思える。確かに、この作品には素直に楽しめない一面があった。やや観念的すぎたのかもしれない。誤解を承知で言えば、娯楽作品にこそスコットの手腕が発揮されるのではないか。もっと言えば、Ｂ級作品にこそ彼の本領が発揮されるのではないか。だから、著者が評判にならなかった『誰かに見られている』（１９８８）について語ってくれたことに感謝したい。これはスコットには珍しいサスペンス＆ロマンで気に入っている作品のひとつ。これが代理監督で撮ったというので驚いた。最近の彼は、映画づくりについて「私は物語を語りたいのだ」というようなことを語っていたそうだ。軍事作戦の

顛末がリアルな『ブラックホーク・ダウン』(２００２) も撮り、さらに得意とする歴史劇も数本作っている。中でも、『グラディエーター』では、無常観にも似た寂寥感などの東洋思想が感じられ、黒澤明の『乱』(１９８５) を想起したとの指摘には、大いに共感してしまった。私は、以前からスコットと黒澤にはなんらかの共通項があるのではないかと思っていたので、はたと納得したしだい。著者には、今後も彼の軌跡を追ってほしい。別の狙いがあったような気がする『ブラック・レイン』(１９８９)、誘拐の顛末を描いた『ゲティ家の身代金』(２０１７) など広範囲の作品を連発する彼の素顔を暴いてほしい。果たして、多作家リドリー・スコットとは何者なのか？もしかすると、スコットは何でも撮る職人監督に過ぎないのではないか？スコット自身は、いったいどんな問題意識を持って映画を撮り続けているのか？――著者には、この謎を解明すべく引き続き、リドリー・スコット作品検証の輪を広げていってほしいと切に思うしだいである。

○

不思議なもので映画は見てない作品については語れない。見ていれば、そこで会話がはずむことになる。今や、ＤＶＤやネット配信などにより過去の作品も、比較的見ることができるようになった。本書を読んで無性に見たくなった作品が多々あった。時間をみつけてそれらをじっくりと吟味していくつもりである。著者が、渡哲也やバットマン、リドリー・スコットたちに注いだ膨大な時間や熱量や想いを、思わず羨望してしまう自分がいる今日この頃である。

久保喜之さん「侏儒の映画館」に寄せて

堀江広子

久保さんの「侏儒の映画館」を贈って頂いた時、まずその分厚さに圧倒され、目次を見て今度は呆然としてしまいました。私が観た映画が殆どなく、唯一「ジャンゴ　繋がれざる者」だけが分かり、また観てはいませんが「モリのいる場所」が目に留まりました。そして心に響いたのが、韓国映画「牛の鈴音」です

「モリのいる場所」の画家熊谷守一画伯は私の好きな画家のおひとりです。岐阜県の付知町産まれその後岐阜市で幼少期を過ごしています。現在縁あって岐阜に住む私は身近に感じ、画伯に関する情報にはとても関心があります。時々岐阜県美術館などで熊谷守一展が開かれたりします。初めて画伯の絵を観たのが20代後半の頃で悩みの中にあった私は、画伯の極端にデフォルメされた絵に強く惹かれました。「中秋の名月」「ヤキバノカエリ」や蟻や猫の絵が好きです。

「牛の鈴音」

久保さんは、画家の生き方と老後の過ごし方に共感を持ち、憧れると書いておられ、それはそれで理解出来ます。ある意味、男の生き方の理想かもしれませんね。

ただ、女である私にとっては、画家としての熊谷守一さんには尊敬の念を持ちますが、伴侶としては無理。むしろ生涯支えた妻の秀子さんの偉大さに心が持っていかれました。

久保さんの「牛の鈴音」を読み始めた時の私は、夫が病院に通うのに付き添い、コロナ禍だから車の中で待っていて欲しいと言われ、駐車場の車の中で本を開きました。ひんやりとした早朝の静けさに包まれた駐車場は読書にぴったりでした。神経が研ぎ澄まされている私の頭の中で、久保さんの文章が、脳から心に振動のように深く入り込んでいきました。ご自身の子どもの頃の祖父母との体験と、韓国の寒村に暮らす貧しい翁と媼が重なり、人に課せられた逃れられない宿命に時に抗いながらも、かけがえのない人生を全うしていく人たちを愛しく思う久保さんの心情に涙せずにいられませんでした。

2023年上半期のおすすめ映画

「ドリーム・ホース」（ユーロス・リン）イギリス映画。田舎町で住民が共同馬主になる。馬がレースで大活躍。

「イニシェリン島の精霊」（マーティン・マクドナー）1927年のアイルランドの孤島。友人（ブレンダン・グリーソン）から絶縁宣言を喰らう主人公（コリン・ファレル）。

「崖上のスパイ」（チャン・イーモウ）戦時中の満州。4人の中国人スパイが中国人要人を国外へ脱出させる作戦を敢行する。それを阻む日本の特務機関との暗闘。

「バビロン」（デイミアン・チャゼル）無声映画からトーキーに移る時代のハリウッド。狂乱の時代を描く。ブラッド・ピット、マーゴット・ロビー、ディエゴ・カルバ。

「エンパイア・オブ・ライト」（サム・メンデス）海辺の町の斜陽の映画館。人種差別の嵐も吹き荒れた、サッチャー首相の時代。精神を病んだことがある女性従業員（オリビア・コールマン）と黒人スタッフ（マイケル・ウォード）との恋物語。

「夜明けまでバス停で」（高橋伴明）普通に暮らしていた女性がなぜホームレスに。実際の事件に材をとった。板谷由夏主演。柄本明、根岸明美、ルビー・モレノ、三浦貴大。

「逆転のトライアングル」（リューベン・オストルンド）クルーズ船が難破して無人島に放り出された乗客とスタッフ。立場が逆転。

「フェイブルマンズ」（スティーヴン・スピルバーグ）監督の自伝的な作品。恵まれた家庭で育った少年が映画に興味をもち、映画界に就職するまでを描く。

「ロストケア」（前田哲）介護施設で働く男（松山ケンイチ）と父親を孤独死させた女検事（長澤まさみ）。安楽死は許されないのか。

「生きる　ＬＩＶＩＮＧ」（オリヴァー・ハーマナス）黒澤明「生きる」のリメイク。脚本＝カズオ・イシグロ。黒澤明とはまた違った味わい。

「赦し」（アンシュル・チョウハン）娘を殺された親と加害者の女性の物語。監督はインド出身。

「妖怪の孫」（内山雅人）安倍晋三の悪行の数々。アベノミクスを本人自身が信じていなかった事実。

「最後まで行く」（藤井道人）韓国映画のリメイク。母危篤の報せを受けた刑事（岡田准一）は、病院に急ぐ途中交通事故で人を撥ねて死なせてしまう――。

「帰れない山」（フェリックス・ヴァン・ヒュルーニンゲン、シャルロッテ・ファンデルメールシュ）イタリアの山の麓。男同士の友情。生き方を探す物語。

「聖地には蜘蛛が巣を張る」（アリ・アッバシ）イスラムの娼婦連続殺人事件を追う女性ジャーナリストと殺人犯の物語。

「波紋」（荻上直子）筒井真理子・主演。ある日夫（光石研）は蒸発。半年してその夫がガンになって戻ってくる。キムラ緑子、木野花、共演。

「怪物」（是枝裕和）子供がいじめにあった母親（安藤サクラ）、生徒に暴力を振るったらしい先生（永山瑛太）、当の子供たち、の3視点から学校で何があったかが語られる。

筆者の近況等

門馬徳行＝この3年で映画の見方が変わった気がする。見たい映画の範囲がだいぶ狭くなってしまったと思う。ＳＦ、ラブロマンス、コメディ、アニメなどに興味がなくなりつつある。今の自分がどんな映画を求めているのか、相変わらず映画の旅は続く。

中田好美＝最近ではイラストもＡＩが出力するようになり、夏休みの宿題にＣｈａｔＧＰＴ（対話型人工知能）を使わないよう注意喚起が出ていた。便利になればなるほど、大切な何かが失われていくような気がする。

星文子＝コロナ蟄居の流れで、いまだにうちご飯、うち映画の日々です。アマゾンプライムの会員なので映画はもっぱら無料のプライム。前から見たかった50年代の映画や岩波ホールで上映していた問題作、話題作などラインナップもなかなかです。プライムで見つからない作品はＴＳＵＴＡＹＡ、韓ドラはＮｅｔｆｌｉｘですが、いじめや暴力を扱ったドラマが多くてうんざりです。恋愛物でもヒロインに魅力が足りないように感じるのはおばさんのやっかみでしょうか。

久保嘉之＝退職して半年が過ぎました。その間、読書したり、ＤＶＤを観まくったりと、それなりに充実した日々ではありましたが、流石に仕事しないと身体がなまるなと思い、シルバー人材センターに申し込みました。斡旋してくれたのが、前職がタクシー運転手だった所為か、高齢者の介護施設への送迎でした。年寄りが年寄りの送り迎えをする。高齢者社会に変貌した世の中を、つくづく実感してます。

森田洋一＝仕事がかなり忙しいため、空き時間を作ってレイトショー中心に劇場へ、ロードショーをみにいっています。この夏も楽しみにしている作品があります。元々、クラシック映画が好きなので、作品鑑賞する時も、この場面は、きっとこのシーンを参考にした、演技する人の雰囲気はきっとこの役者さんをイメージしたのだろうと、いう視点をもってみていることが多いです。

関田孝正＝農律さん、10回の連載ありがとうございます。毎回いの一番に送られてくる、原稿用紙に万年筆で書かれた原稿を楽しく読ませていただきました。ガードマンの仕事、これからもがんばってください。鈴木輝夫くんも毎回筆圧の強いボールペンで原稿用紙の升目をしっかり埋めた原稿を送ってくれました。前回の原稿が絶筆となってしまいました。ご冥福をお祈りいたします。病気等で休んでおられる執筆者もいます。全快を願うばかりです。みんな若かった頃に比べれば多少の衰えは致し方のないところ、元気にがんばりましょう。

アルツハイマーの殺し屋の物語

「MEMORY　メモリー」

年老いて物忘れがひどくなり引退したい殺し屋（リーアム・ニーソン）、メキシコの人身売買組織を追うFBI捜査官（ガイ・ピアース）、大金持ちの美人実業家（モニカ・ベルッチ）が絡む犯罪アクション映画。

殺し屋はアルツハイマーを病んでいる。老け込むまで〝仕事〟をつづけてきたということは、それだけ数えきれない人間を闇に葬ってきたのだろう。記憶力に自信がなくなり腕にメモをしたり薬を飲みながら仕事をしているが、へまをする前に引退したいと考えている。が、犯罪組織はそんなことにはお構いなしだ。腕を見込んで仕事を依頼する。抹殺する人物のなかにはメキシコ人少女も含まれている。殺し屋にも殺し屋なりの倫理・正義感があり、子供はさすがに手にかけることができない。殺し屋はいきずりの女にもやさしい男だ。彼には施設にいる兄がおり見舞いにもいくが、兄は完全なアルツハイマーで、昔話をしても話が通じない。

どんな理由であれ殺し屋が仕事をしなければ、組織にとってしめしがつかない。少女でも依頼人の頼みとあれば殺さなければならない。殺し屋の倫理観など組織は知ったことではない。仕事をしない殺し屋には用はない。車に爆弾を仕掛けられ、一夜を過ごしたいきずりの女が銃弾に倒れ、それをきっかけに殺し屋は反撃に出る。

FBIは人身売買組織を追うなかで少女を保護することになるが、何者かによって殺されてしまう。少女がなぜ殺されなければならないのか。

殺し屋は殺しの依頼の悪事を知るにいたり黒幕の存在もつかみ、証拠（ある犯罪を映したUSB）をも手に入れる。殺し屋は自分の犯罪はさておき、少女殺しだけは許されないと考える。そこでFBI捜査官に本名を名乗って電話を入れ、少女殺しの捜査が遅いと詰る。捜査官は同僚に電話の逆探知を依頼、捜査本部の前の公園から電話をかけていることを突き止め急行するがすでに姿を消している。

FBIの人身売買組織を追うチームは、ガイ・ピアースのほかに、女性（タジ・アトウォル）、メキシコの捜査官（ハロルド・トレス）など4名からなるが、彼らに対して指揮官（レイ・フィアロン）・上層部はなぜか捜査に協力的ではない。

殺し屋は悪事を働いた男を始末したあと、逃走する途次にメキシコの捜査官から銃で撃たれ重傷を負う。逃げて疲れ切って車の中で寝ているときに警邏中の警官から職務質問を受け誤って射殺してしまい、警察を完全に敵にまわしてしまう。殺し屋は傷の手当てをし、悪事を隠蔽しようとする黒幕である女実業家に近づく。警察は彼女の住むマンションの警備を固める…。

記憶を失いつつある殺し屋。兄弟との記憶、殺し屋を使って隠蔽しようとする悪事を記録したUSB、FBI捜査官の忘れられない過去――。捜査官は妻子を交通事故で亡くしている。交通事故の目撃者は事故ではなく殺人だと主張するが、はっきり加害者を特定できない。記憶があいまいなせいだ。記憶にまつわる話が物語に関わってくる。

多くの人間が登場するが描き分けをたくみに行い、また複雑な話をわかりやすく処理して飽きさせない。

登場人物の面々はキャリアを積んで今や押しも押されぬスターである。私の記憶を繙けば、リーアム・ニーソンは誰にでも変装できる男「ダークマン」（91・監督＝サム・ライミ）として私の前に現れた。人工皮膚の研究者であるが、汚職事件に巻き込まれ犯罪組織の手で研究室ともども爆破され命からがら復讐に生きる。ただ変装できる時間は99分と短いのがハンデとなり、そのハラハラドキドキが面白かった。ガイ・ピアースは「L．A．コンフィデンシャル」（97・監督＝カーティス・ハンソン）に正義派警察官としてラッセル・クロウ、ケヴィン・スペイシーとともに登場。モニカ・ベルッチは「マレーナ」（00・監督＝ジュゼッペ・トルナトーレ）で肉体派美人女優として立ち現れた。

脚本はダリオ・スカーダ。ペイン。監督はマーティン・キャンベル（「007／ゴールデンアイ」（95・ピアース・ブロスナン）、「007／カジノ・ロワイヤル」（06・ダニエル・クレイグ））。

原作はベルギー映画「ザ・ヒットマン」（エリク・ヴァン・ローイ監督・脚本、カール・ヨース共同脚本。原作＝ジェフ・ヒーラールツ『De Zaak Alzheimer』）。

つまり、本作はリメイク作品。原作のベルギー映画が面白いのでリメイク権が争われたという。黒澤明の「用心棒」と、そのリメイク作品セルジオ・レオーネの「荒野の用心棒」のどちらも優劣つけがたい面白さが、「ザ・ヒットマン」と「MEMORY」にもある。

（関田孝正）